



何が文明間・宗教間の共存を妨げてきたのか —「キリスト教世界」の創造と終末—

同志社大学大学院神学研究科教授

小原 克博



それでは、1時間ほど、このテーマで話をさせていただきます。

お手元に6ページの資料があるかと思います。これは実は、今日の朝5時ぐらにようやくできたばかりで、本当に中身は粗雑なところもあるかと思っています。他方、続いて発表する森先生はキーノートというソフトで作られたファイルをパワーポイントできれいに発表されるかと思いますが、年期の差と言いますか、未熟者と年期の入った先生と差を感じていただければいいと思います。

したがって、私はちょっと詰め切れてない部分もあるんですが、この5年を振り返って、今日ののちの議論のための、この材料をいくつか提供してみたいと考えています。ですから、レジュメではいろいろ細かいことも書いているんですけども、細部については少しスキップして、のちのディスカッションのなかで、より細かい議論ができるのではないかと思います。

1. はじめに

では早速、はじめていきます。「はじめに」ということで、最初に今回の私が話す方法論といいますか、考え方につきまして、2点説明をしておきます。

まず1点は、何が「共存」を妨げてきたのかということを考えるときに、何かそういう阻害要因がある、あるいはこれがあるから問題が起こってきたんだということで、要素還元的な考え方をする場合があるかと思うんですけども、今回、私はそういう立場はとりません。むしろ同じ要素が

状況を異にすることによって、非常にポジティブにはたらく場合もあれば、ネガティブにはたらく場合もある。これはわれわれが抱えているDNAの働きなんかと非常によく似ていると思うんです。ある種のレガシーとして、キリスト教が持っているいろんなものがありますけれども、それが特別の環境においては病気になったり、あるいは違う状況ではよい機能を働かすという、そういうことがあると思いますので、どういうコンテキストにおいて問題が生じているのかということに、むしろ関心を絞っていきたいと思っています。

ですから例で挙げましたけども、よく言われるように、この一神教はただ一人の神を信じるから、お互い排他的なのだと。つまり一神教という信仰、こういう要素を持っているから、キリスト教とイスラーム、あるいはイスラームとユダヤ教、これらはお互いに相交わったり、和解することはできないのだというような説明の仕方がよくされますけども、これも要素還元的な説明の仕方であって、私は間違いであると思います。一神教的な信教が、むしろ寛容を担保すると言いますか、寛容の基盤を与えるということも当然ありうるわけであって、どういうときこういった問題が起こるのかということを実際には考えていかなければなりません。それから例えば、同志社が属している伝統に、会衆派とか組合派と言われるような教会の伝統がありますが、教派を取り上げるときも、会衆派教会は民主的であるという言い方をよくされるんですけども、これも実際、同志社の歴史を振り返って考えるだけでも、必ずしもそ



う簡単に言えない部分がたくさんあるということがわかります。どういうときに、そういう民主的であるポテンシャルティが発現するのか、あるいはそういったものが妨げられるのかという条件設定のほうがむしろ大事だと考えます。

それから2番目。今回、私が考えたい「共存」の対象を、一神教のあいだだけに限定はしません。もちろんそこにフォーカスがあることは間違いないんですけれども、実際にキリスト教がどういうものであったのか、ありうるのかということは、そういった一神教世界とは違う世界との接触のなかで形成され、またさまざまなイメージを生み出してきていますので、この非西洋世界においてどのように見られてきたのかということを少し、今回、意図して関心のなかに入れていきます。非西洋と言いましても、一切合切含めるわけにいきませんので、主として日本においてどういう対応関係があったのかということを今回取り入れています。

2番目、問題の素材ということなのですが、今回サブタイトルに上げました、括弧付きの『「キリスト教世界」の創造と終末』ということ、発表の中身にしたいんですけれども、このサブタイトルには二重の意味を込めています。これはこれから発表する、いわば大きな筋立てにもなるんですけれども、一つは、「キリスト教世界」という観念が、当然この観念には、それに対応する実態もあるわけなんですけれども、そういった観念が創造されたり、あるいはそれが役割を終えていくなかで起こった変化、ここにおいて、やはりさまざまに「共存」を妨げる要因を見いだすことができるだろうと考えています。ただし、これはキリスト教のすべての歴史を振り返ってみることは非常に難しいですので、差し当たり、こんにち私たちが抱えている諸問題の直接的な原因とか前提となっているような近代、とりわけ19世紀以降の変化について、今回は焦点を当てていきたいというふうに考えています。

それから2番目なんですけれども、この「キリスト教世界」という観念は、たしかに19世紀ぐらいに問題化してくるんですが、そのように呼ばれている「キリスト教世界」における創造とか終末をめぐる言説というものがあります。これは、言ってしまうと、神学的な議論というものがありまして、創造とか終末ということをめぐる、どのような神学的な議論があり、それが単に神学的な議論にとどまらず、政治や、あるいは文明理解に、どのような影響を与えてきたいのかということ、これを今回見てみたいと思います。

2. ケーススタディ

それで、いま申しあげました二つの大きな柱は若干抽象度が高いので、いきなりそこに入ってしまうと少し混乱する場合がありますので、少し私たちの思考を解きほぐすために、まずいきなりケーススタディから入ってみたいと思います。つまり何がこの「共存」を妨げているのか、きたのかということ、これを少し考えるうえできっかけになるような素材を、ここでは大きく言うと4人いるんですけれども、取り上げてみたいと思います。大きく「西洋とキリスト教」という項と、それから「非西洋とキリスト教：日本の場合」という二つをまず分けたいんですけれども、「西洋とキリスト教」のなかで、ヨーゼフ・ラッツィンガーとトニー・ブレアの例を挙げています。

1) 西洋とキリスト教

① ヨーゼフ・ラッツィンガー

まず、なぜラッツィンガーを取り上げたのかということです。これはカトリックのボスであり、私はもちろん一定の敬意を払って、今日これからいろいろお話をしたいと思っていますが、端的に言うならば、この数年、彼ほどこの「共存」ということをめぐって、お騒がせ者はいないというふうに言っていると思います。さまざまな問題を実際引き起こしてきていますので、実際、どのよう



な意味で共存を妨げてきたのかということを考えるときに、ラッツィンガーがローマ教皇になって、その後の事情、そして私が今日取り上げたいのは、ローマ教皇になってからのことも説明しますけれども、彼が枢機卿時代に話した講演がありまして、そこから問題をちょっと考えてみたいと思います。これは日本語にもなっていて、2004年にドイツ語で出たものが、今年、岩波から日本語に翻訳されて、『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』ということで、これは2004年、ミュンヘンで行われたユーベンハーバマスとの討論の際の基調講演が収められています。私はこのラッツィンガーの基調講演を見ると、のちに、つまり彼がローマ教皇になってから引き起こした数々の問題の根っこが、すべてここに集約されているというふうに見えていいんじゃないかと思います。ですから、そういう「共存」を妨げるもの、結果的にたくさん出てきているんですけれども、そういう瑣末な現象それぞれを扱うのではなくて、その根っこにあるところをちょっと押えてみたいと思いました。これは日本語では非常に大きく意識されているんですけれども、もともとのタイトルはドイツ語で、*Dialektik der Säkularisierung: Über Vernunft und Religion* で、直訳するならば「世俗化の弁証法、そして理性と宗教をめぐる」というもので、これが実際の内容を正しく反映していると思います。ハーバマスという人は、みなさんも名前ぐらい聞かれたことがあるかと思いますが、日本語にもたくさん訳されています。私はドイツに留学していたこともありまして、実はハーバマスにけっこうはまったクチなんですけれども、やはり現代のドイツを代表する知識人、哲学者です。彼はこのリベラルレフト、ドイツ語圏の左派知識人のなかでも、もっともラディカルな論客の一人です。左の局にいるというふうに言ってもいいと思います。それに対して、ラッツィンガーは、いわば右の局です。ですから、普通、絶対出合うことがないような水と油とが出合って、

話合った、そういうときが2004年にあったんですけれども、ハーバマス自身はラッツィンガーに2004年に初めて会ったんですが、そのときにライオンの洞窟に行くような気持ちだと、その恐れをあらわしていたんですけれども、それぐらい二人はまったく違う立場で、それぞれの世界で生きてきた、そういう意味では非常に面白い本です。

いま、ちょっと説明をしながら、ふと思ったんですけれども、ハーバマスという人は、実はアドルノーとかホルクハイマーという、これはフランクフルト学派と言いますけれども、『啓蒙の弁証法』という有名な本を書いた人たちの系譜を引いています。『啓蒙の弁証法』というのは、*Dialektik der Aufklärung* というふうにドイツ語で言うんですが、いまふと気が付いたんですけれども、まさにそれをちょっともじっているということですね。この *Dialektik der Sakularisierung* というのは、おそらくドイツ人の知識人であれば、ハーバマスなどの著作を思い起こすのだらうと思いました。

それでこの文章において、何が示されるのかということのはちほど見ていきたいんですけれども、ラッツィンガーが教皇になってから、いったいどういう問題が起こってきたのかということをごっと見てみたいと思います。これはみなさんよく知っていることもあれば、え、こんなことがあるのということもなかには入っているかもしれません。ラッツィンガーは、2005年の4月19日に教皇になっています。しばらくたってから、7月、教皇が『ハリー・ポッター』シリーズへの強い懸念を示した書簡が公開されて、欧米のメディアにこれは非常に取り上げられました。日本ではほとんど紹介されていけませんので、ご存じない方も多いと思うんですけれども、実は日本では昨日、『ハリー・ポッター』シリーズの最新作が公開されたんですけれども、めったにこういう問題は議論されませんが、いまでもカトリック世界とかアメリカのエヴァンジェリカルの中なかでは、ハリー・ポッターに、例えば子どもたちが触れるこ



とをどう考えたらいいんだろうかということを、けっこう真剣に議論されているんですね。つまりこれは、単なるサブカルチャーとして存在しているのではなく、世俗文化の中核にやはりハリー・ポッター的な考え方があると。ですから、魔法を使うとか、魔女が出てくるとか、そういうことに対して、もともとカトリックは非常に敏感な反応を示しますけども、エヴァンジェリカルも巻き込んで、ハリー・ポッター的なサブカルチャーが子どもたちの精神衛生上よくないという、こういった議論がしばしばなされて、いまに至っています。英語で書かれたサイトなどを見ると、この手の話題は本当に至るところにありまして、なぜこんなに議論をするんだろうかというふうに、私などちょっと驚きますけれども、実際にはかなりの話題になっています。これは私たちからすればさほど関心に上がらないんですけども、先代のヨハネ・パウロ2世、そして現在のベネディクト16世にとっては、この世俗化ということは一番大きなテーマの一つです。つまり、世俗化したヨーロッパのなかで、キリスト教をどう伝えていくのか、あるいはカトリックというものをどう立て直していくのかということが非常に大きな課題になって、その動機付けから、さまざまなやはり問題が生じているということを考えるならば、これはたしかに小さな一例ですけども、世俗化ということを真剣に問うまなざしをそこに感ずることが出来ます。

それから次、これは非常に有名になりまして、そしてこれについては森先生が、かなりまとまった文章を書かれましたけれども、2006年9月、レーゲンスブルク大学での講義内容——これは神学の講義だったんですけども——が、ムスリムから批判を受けました。ムハンマドが新たにもたらしたものは、邪悪で冷酷なものだけだという14世紀のビザンチン皇帝の引用をしたわけですね。講義のテーマそのものは、信仰と理性をめぐるものでしたが、そのなかでこういう引用をする

ことによって、非常に激しい批判を受けます。この問題は、のちに触れるラッツィンガーの文書、すなわちここで上げている『世界を統べているもの』という彼があらわしている文章に直接つながっていきますので、のちに触れたいと思います。

次のページをめくってください。2007年5月、このあたりからごくごく最近の話になります。ですので、生々しいんですが、教皇は5月にブラジルに行きました。なぜブラジルに行ったのかといいますと、かつてラテンアメリカというのは圧倒的なカトリック世界であり、しかも世界のカトリック人口の半分近くをラテンアメリカが占めているんです。ところが、その牙城がいま大きく揺らいでいます。かつてであれば、ほぼ100%とまでは行かなくても、95%以上がカトリック信徒であったのが、現在では70%を切るか切らないかというところまでカトリック人口が激減しているんですね。これはペンテコステ派を中心とする福音派のプロテスタント勢力が食い込んできているというのが直接の原因なんですけれども、こういったことがブラジル訪問を決意した背景にあります。しかしブラジルでは、歓迎されたという面ももちろんありますけども、別の批判も受けました。それはここに書いているとおり、カトリックの司教会議のなかで話した言葉なんですけど、「福音を説くことで、コロンブス到達前の文化の自主性を奪ったことはなく、外国文化の押し付けでもなかった」あるいは「先住民は聖職者の到来を歓迎した」というふうなことを語って、これがすぐさま報道されてしまいました。そして、それが、一例を挙げていますけども、虐殺や奴隷労働の歴史を無視した、つまりカトリックがからんだ、そういった負の歴史を無視した発言だということで、非常に厳しい批判を現地の人々から受けることになって、ローマに帰ってから、パチカンに帰ってから、あらためて自らの発言を修正するということをしています。ヨハネ・パウロ2世は、実際に頻繁にラテンアメリカに行ったんです



けれども、彼自身は植民地化の問題ということを非常に真摯に受け止めた発言などをしており、そのへんが対照的ですね。いずれにしてもこういう発言をしています。

それから2007年7月7日、このあたりになると本当最近なんですけれど、これは「1970年の改革以前のローマ・ミサ典書の使用についての自発教令」を発表し、ラテン語ミサを特別の許可なく使ってもいいですよというようなガイダンスを示しています。これはまだ議論されている途中で、カトリックの内部でもさまざまな意見があります。しかし、第2バチカン公会議以降、カトリックは基本的に各国の言語でミサをおこないましょうということできていまして、ラテン語ミサを強要するということに対してはかなり嫌悪感があっただんですが、現在の教皇になってから、ラテン語ミサということ、やはりカトリック世界の統一の一つの印として勧めようとする動きがあります。これがのちに触れますコルプス・クレスティアヌム、キリスト教世界という観念と直接に結び付いてきます。すなわちコルプス・クレスティアヌムというのは、まさにラテン語によって支えられている世界ですので、そういった世界への羨望と回復へのあこがれ、こういったものがここに感じられます。

それから7月10日に、「教会についての教義をめぐり質問への回答」という声明を発表いたしました。このなかで、カトリック以外の教派、これはもちろんプロテスタントのことを直接に示しているんですけれども、適切な意味では教会ではないというふうに記すことによって、世界教会協議会、WCCであるとか、ルーテル世界連盟であるとか、世界改革教会連盟などから批判、懸念の声、あるいは質問書などがバチカンに寄せられています。この議論はいまも進行中のものです。ちょっと驚くような内容ですが、やはりカトリックの優位性ということを再確認したということです。

こういうことだけ見ると、まさにいまの教皇の

さまざまな発言が、「共存」ではなくて、共存を妨げるものとして機能しているということがわかりいただけるかと思います。これらがいったいどこに根っこがあるのかということ、私は2004年のハーバマスとの討論のなかで語られた「世界を統べているもの」という文章のなかに見たいと思います。時間の都合上、細かく見られませんので、どういうポイントが書かれているのかということは、そこの一覧をご覧ください。テロの問題に触れていたり、短い文章のなかでイスラームについての言及がしばしばなされています。ビン・ラーディンという名前も2度ほど出てきます。

黒丸で五つ目ぐらいのところに「近代ヨーロッパに生じた二重の断絶」ということが語られていまして、この点は大事です。括弧のなかで、「ヨーロッパ・キリスト教世界の外部世界との接触」、これはかつてラテン語世界で統一され感のあった、いわばキリスト教世界というものが、いわば自己完結的な法を持っていたわけです。ところがそれが外部の世界と接触することによって、カトリック的な観念とか、あるいは西洋的なものの考え方を共有しえないような人々と出合ったときに、その人々をどのような法のもとで治めたり、理解したらいいのだろうかという疑問がここから沸いてくるわけですね。そこでこの「諸国民の法」というものが出てきます。これは最近日本語にもなったロールズの『万民の法』のようところにもつながっていきますが、ここにはヨーロッパ世界、つまりキリスト教世界とは何かということを語るうえでの一つのポイントがあります。

それからこの文書のなかでは、異文化対話、インターカルチャルな視点ということがたくさん出てきますが、何もカトリックを絶対視しているわけではないんです。そこにも括弧のなかで書きましたように、「キリスト教信仰と世俗的合理性は普遍性を持っていない」と。この場合の「キリスト教信仰」、「世俗的合理性」というのは、ヨー



ロッパのという当然前提がありますが、そういうヨーロッパ的な考え方、普遍性を持っていないということは一方では認めるんですね。しかし、どうも腹の底は違うんじゃないかということが、だんだん結論のなかで明らかになってきます。

結論として、ここでは二つまとめておきましたが、「宗教のパトロギー、理性のパトロギーを抑制するために、宗教と理性は相互関係のなかに置かれなければならない」ということをまず語っています。これは病理とか、異常性ということですね。そういったものを、宗教も理性も持っているんだということを語るわけです。このまさに「理性のパトロギー」というのは、ハーバマスが一番得意とするところですけども、そういったものがそれぞれ問題を抱えているから、相互に浄化し合うような関係を持たなければいけないんだということを一方で語るんですね。これは、西洋的な文脈のなかで語っています。そして、それを西洋的な文脈に収めるだけではなくて、「インターカルチャルなコンテクストのなかで具体化していかなければならない」ということを、ラッツィンガーは語ります。そこで、この文章の最後の結論部分にあたるんですけども、引用をしておきました。「この相関性のなかで、さまざまな文化が理性と信仰の本質的な相関性——ここで言っているのはヨーロッパ、西洋の理性と信仰という意味です——を受け入れるようになれば、普遍的な浄化のプロセスがはたらきはじめ、そのプロセスのなかで、最終的にはすべての人間が何らかの感じで知っている、あるいは感じている本質的な価値や規範が新たな輝きを得て、世界を統べているものが再び人類において働く力となりうるのである」と、非常にすっきりとした文章なんですけれども、このあたりにさまざまな問題をのちに引き起こす要素が集約されているというふうに、私は感じています。すなわち、さまざまな問題に対する自覚というのはあります。しかしヨーロッパ的な信仰概念、理想概念ということモデルにし

て、それが結局、暗に異文化的な文脈においても機能することによって、世界はよりよい知衆のなかに入れられていくんだという考え方があるということです。ここで「理性」という言葉を使ったときに、ラッツィンガーはこれはもう完全に西洋の文脈のなかで使っています。先ほど触れましたレーゲンスブルク大学での問題においてもこれは通じますが、理性を、ある種、西洋キリスト教世界の専有物として考えているふしがあるんですね。それがあって、そしてその裏返しの意味として、イスラーム世界にはそういったものがないんだということが、レーゲンスブルク大学においても暗に語られていたがために、余計にイスラーム世界から見るならば、しゃくさわったというところがあるというふうに思います。だから単にビザンチン皇帝の発言の問題だけではなくて、もちろん理性の伝統、理性と信仰をめぐる伝統というのは、イスラーム世界のなかにもとうとうと流れているわけなんですけれども、そういったことに対してはあまり十分な配慮を払わずに、理性あるいは人権という、あるいは「自然法」ということもそうですけれども、それは全てが西洋世界のなかで生まれた産物であるという感覚が非常に強くにじみ出ていると考えます。ですからこのあたりが、いま実際に「共存」を妨げている諸現象が起こっている根っこにあるだろうと考えられるわけです。

② トニー・ブレア

それから次ですけども、トニー・ブレアの例を挙げたいと思います。いま宗教的な側面から上げました。ブレアのものとしては、これは今年の『フォーリン・アフェアーズ』の2月号のものなんですけど、日本語では「テロとの戦いの本当の意味は何か」となっていますが、英語のほうがより正しく、彼の意図をもちろん示しています。A Battle for Global Values ということで、Global Value というものを広めていく、これによってテロとの



戦いに勝利するんだ、すべきなんだということが一番の骨子になります。ここに『フォーリン・アフェアーズ』そのものに記されていた要旨を引用しておきました。最後のところが一番大事だと思いますので、2ページの下から2行目ぐらいを読んでみたいと思います。「力の領域においてだけでなく、価値をめぐる闘いで勝利を収めない限り、イスラーム過激主義の台頭というグローバルな流れを抑え込むことはできない」ということで、その「価値」ということを非常にブレアは重視するんですね。これはテロとの戦いということが9.11以降言われてきていますけども、そういうことのなかにあるロジックを非常によくまとめた文章であるというふうに私は感じました。もちろん問題点もたくさんあると思います。

ここでは二つほどきっかけになるような文章を引用しておきましたけども、3ページのところで。「イスラーム過激派の戦略が明らかになるにつれて、1990年代後半、イスラーム世界のなかで抗争を続ければ、礼節を知り、公平さを重んじる穏健派イスラーム教徒は、過激派の思想を拒絶する危険があるし、その場合、イスラーム教をめぐるイスラーム教徒間の内戦になってしまう。こう状況を読んだイスラーム過激派は、イスラーム内戦とはまったく対立構造をつくり出す必要があると判断した。それが『イスラーム対西洋の戦い』だった」ということで、ブレアの理解によれば、こんにち、テロとの戦いということの前提となっているような、例えばイデオロギー、特にイスラーム過激派が持つイデオロギーはイスラーム対西洋、西洋は敵なんだという観念を彼らがつくり出したんだと言っているわけですね。ですから、そういう過激派がつくり出したこういったものを打ち破るためのGlobal Valueというものを広げていかなければならないというのが、ブレアの立場です。ところが、のちに指摘しますように、イスラーム対西洋という図式はイスラーム過激派がつくったのではなくて、19世紀のヨーロッパにおいて形成され

ています。このことをブレアはまったく理解をしていません。

それから引き続き読みます。「われわれの価値は西洋的なものではないし、ましてやアメリカ的、アングロサクソンのものでもない。それは人類社会が共有する普遍的な価値であり、地球市民が権利として持つべき普遍的価値である。この点を広くアピールする必要がある」ということで、このあたりは先ほどのラッティンガーの結論と非常によく響き合います。ほぼ同一だというふうに言ってもいいと思います。つまり西洋的な価値を非常にそこに立脚していながら、しかしそれは西洋的なものではなくて、グローバルに適用可能なんだということを語っていくわけです。私はたまたまこの両者のあいだに、宗教界、政治の世界と違いはあるとはいえ、強い相関性を感じましたので、二人を決裁人として選んだんですけれども、そのあと、この二人が個人的にも特別な関係にあるということを理解しました。ブレアが首相を退任する3日か4日前にバチカンを訪ねているんです。そしてローマ教皇と会って話をしています。実は彼は在任中に3回バチカンを訪ね、また2回教皇と会っているんですけれども、おそらくこのブレアは教皇に非常に強いシンパシーを感じているはずです。そして彼は退任後、キリスト教徒とイスラームとユダヤ教の対話のための特別なファウンデーションをつくりたいということも公言していますけれども、そういったことをベネディクト16世に相談をしに行ったというふうに、英国の『タイムズ』紙などは伝えていました。ですからたまたま取り上げたんですが、実は二人のあいだにはそういうパーソナルな関係もあるということです。

2) 非西洋とキリスト教：日本の場合

①島地黙雷(1838-1911、浄土真宗本願寺派)

時間の都合がありますので、先を急ぎますが、では日本の場合、こういったことがどうなるんだ



ろうかということで、時代を現代ではなくて19世紀に移します。非西洋とキリスト教ということで、キリスト教がどのようなものとして見られていたのか。特に「共存」という視点から、ここでは二つ例を挙げたいと思います。まだまだいろんな例を取り上げられるんですけども、これは代表的なものに限定したいと思います。

まずは島地黙雷です。彼は本願寺のある種スーパースターの存在です。政教分離を勝ち取ったという、そういう扱いを受けることもあるんですが、実際には彼の、ここに書いています「三条教則批判建白書」によって、のちの神社非宗教論というものの先鞭が付けられたという批判もありますので、評価にはかなり幅があるということはずばり伝えておきたいと思います。いまは政教分離の問題を扱いません。そうではなく、彼が政教分離が必要なんだというふうなことを訴えた「三条教則批判建白書」のなかで1カ所、キリスト教と文明の関係について論じた文章がありますので、そこをちょっと読んでみたいと思います。「欧州開化ノ原ハ教ニ依ラスシテ学ニヨリ、耶蘇ニ原カスシテ希臘・羅馬ニ基クハ、三歳児童モ知ル所ナリ。之ヲ教法ノ功ニ付セントスルハ、『ミシヨナル』家ノ私意ニ出ツ」ということで、簡単に言うならば、島地黙雷だけではなくて、当時の伊藤博文、あるいは岩倉使節団をはじめ、いったいどうしてヨーロッパは大きな文明の開化を迎えたんだろうか。そしてそのことをできれば日本も吸収したいということで、さまざまな使節団が行っていたわけです。この島地は、この欧州開化の源というのは、キリスト教ではなくて、それはギリシャ、ローマの文明に基づくということで、文明のキリスト教を明確に区別します。これは島地だけではなくて、当時の仏教者たちがしばしば用いた論法でありました。

他方、キリスト教宣教師たちはこれを積極的に結び付けるんです。同志社の宣教師たちもたくさん当時いたわけですけども、このことをもっと

も強く打ち出したのが、グリーンという宣教師です。日本が本当に文明化したいんだったら、ちょっと世界を見てみなさいと。アメリカ、ヨーロッパ、文明国と言われる国はすべてキリスト教だろう。だからもし日本が文明国になりたいんだったら、キリスト教を受け入れないといけないんだというふうな、これが宣教師たちの論法であつたわけですね。ですから、そういうキリスト教的なディスコースに対して、仏教の側がそこを明確に区別することによって、キリスト教なしに、つまりキリスト教と共存せずとも日本の文明化は可能なんだということを、この時代から主張をしはじめています。

②井上哲次郎(1855-1944)

それから井上哲次郎が1893年にあらわしている文章をここで挙げておきました。これはその2年前、1891年に内村鑑三が不敬事件を起こしていて、当然それに対する反応なんですけれども、なぜキリスト教が問題なのかということを彼の視点から語っています。ここは読みませんけれども、端的に言うならば、キリスト教は日本的なものとは共存できないということですね。だから、その例として内村を見ろと。やはりわれわれが尊ぶべき教育勅語にすら敬意を払うことができないとは、やはり彼らの本質を明らかにしたのではないかと、ということで、日本的なものとはキリスト教を区別し、両者の共存可能性というものの否定する。こういった流れというのが日本近代史のなかにあるということです。

3.「キリスト教世界」の形成と終焉

1)「キリスト教世界」(Corpus Christianum)の形成

①初期教会論から「キリスト教世界」へ

それではそういったことを踏まえて、以下、ざっと見ていきたいと思います。次に3番目、「『キリスト教世界』の形成と終焉」というこ



とで、ラテン語でいう *Corpus Christianum* という概念がどのように形成されてきたのか。この初期から18世紀ぐらいまでのことについては、いま十分に触れる時間はありませんけれど、これは近代的な概念であると同時に、もちろん古い聖書的な起原を持っています。これは新約聖書のなかに、特にパウロがよく使うんですけれども、「キリストの体 (*σῶμα Χριστοῦ*)」という言葉があるんですね。これはそのパウロの時代から、初期のキリスト教の教会論の基礎をつくることになります。というのは、教会というのは個別の教会、目に見える建物としての教会というものも存在しますが、その個別の教会だけではなくて、そういった教会すべてを、まさにラッツィンガーの言葉を使うならば、それらすべてを統べ治める見えない教会、共同体というものがあって、それこそが *σῶμα Χριστοῦ* だというふうに言うわけなんです。ですから、見える教会を統べ治めるような見えない教会としてのキリスト教共同体というのが根っこにある。これは紀元としては新約聖書にまでさかのぼります。これがのちに、キリスト教が迫害期を経て、ローマの公認宗教になっていく。ですから迫害期においては *supersitio* という迷信というふうにされていたキリスト教が、ローマの公認宗教 *religio* というふうになることのなかで、国家との関係を深め、そしてのちに、制度的な統治機能を教会自身が持つことのなかで、いわゆる宗教的な世界だけでなく、世俗世界も含むところの「キリスト教世界」というものが徐々に形成されていくことになります。ただし、このことはまだまだ対象化されていません。この「キリスト教世界」という概念が成立してくるのはもっとあとになります。

②19世紀、ヨーロッパにおける世界認識の変化

途中は飛ばしまして、19世紀に一気にいきますが、3ページの最後のところですけども、ヨーロッパの自己理解は、19世紀の時点では、

イスラームに対する理解と表裏一体の関係にありました。18世紀頃まではヨーロッパという観念と言いますか、地理的な区分に対応するのは、アジアとか、オリエントという言葉がよく使われていたのですけれども、19世紀ぐらいになるとヨーロッパとイスラーム、あるいはイスラーム世界と、この対比構造というものが圧倒的に増えてくるんです。このイスラーム世界という言葉が、いつ、誰によって初めて用いられたのかということとははっきりしませんが、おそらくナポレオンのエジプト遠征のころぐらいに使われはじめたのではないかということが言われています。

このイスラーム世界という言い方、いま私は「キリスト教世界」ということを問題にしているんですが、イスラーム世界とは何かということも実は、これは非常に大きな問題なんです。これについてはそこに文献として上げておきました、羽田正という人が『イスラーム世界の創造』という本をあらわし、ここで彼は結論として、イスラーム世界という言い方は、キリスト教が、西洋が生み出した観念であって、これはイスラームの実際を語る上では、適切な言葉ではないということを最後語っていますが、これはおそらくイスラーム研究者のあいだでも異論があるところだと思います。例えばこのことを、京大の小杉先生にちょっと話したところ、「いや、やはりイスラーム世界という言葉を使うべきだ」という返答をしてくださったこともあります。ですから、ここはおそらく次の研究会のテーマの一部になるかもしれません。いずれにしても、この「キリスト教世界」とは何かといったとき、イスラーム世界とは何かということ、表裏一体の関係にある、これが19世紀的な事情であったということであり

③「キリスト教文明」

そのキリスト教世界という言葉のいわばシノニムとして、二つ上げておきました。「キリスト教



文明」、それから「世界宗教」という言葉です。「キリスト教文明」ということは、これはイスラーム世界、キリスト教世界と非常に関係があることを工藤庸子という人が書いていますので、そこも引用しておきましたけれども、先を飛ばします。「その大きな流れにひとことだけ触れておくならば、『狂信』と『独裁』と『野蛮』の温床であるイスラームという定式は、19世紀初頭、ナポレオンのエジプト遠征あたりから、徐々に流通しはじめたものである。そのイスラームとの対比のなかで、『キリスト教文明』は顕揚され、新しい人種イデオロギーと協同し、抵抗なく植民地主義的な言説に合体していった」という下りがありまして、このあたりは非常に明確に事柄をとらえているというふうに私は思いましたので、引用をいたしました。

④「世界宗教」(Weltreligion)

それからもう一つのシノニムとしての「世界宗教」なんですけれども、いま、英語で流通する前に、この「世界宗教」という言葉の起源になっているのは、もちろんドイツ語の Weltreligion という言葉です。これはかなりはっきりしています。19世紀初めころに、ヨーロッパ世界からの人が、世界の人々をどのように分類していたかという、キリスト教徒、ユダヤ教徒、マホメット教徒、そしてそのほかのもろもろの偶像崇拜者という、こういった4分類法というものが一般的であって、そのときにはただ一つの「世界宗教」としてのキリスト教が存在していたわけでありませう。それがのちに、先ほど言いました植民地化、そしてそれを通じて、さまざまな「世界の宗教」の知識が流入してくるなかで、特に仏教の存在がヨーロッパに大きなインパクトを与えます。そして仏教はアーリア系の宗教であるということが、これは比較言語学、特に19世紀に発達した比較言語学のなかでだんだんと突き止められていき、その関係のなかで、この仏教はやはり世界宗教と

認めざるをえないだろうという、こういった議論が起こってきて、唯一の「世界宗教」としてのキリスト教だけじゃなくて、それから複数化していく、そういったことが19世紀に起こっていきます。

より大事だと私が思っているのは、この同時代、19世紀にそういうアーリア的なものとは何なのかということがだんだん理解されていくなかで、キリスト教をヘレニズム化、アーリア化、あるいは脱セム化し、イスラームをセム化していくという傾向が強まっていきます。これは言うまでもなく、のちのアンチセミティズムに直接つながっていく、つまり非常に大きなかたちでユダヤ教を疎外する、そういった言説の準備というものが、この時代になされていることであります。このあたりの知識は、増澤知子さんの、磯前先生がアサド氏とともに編集してくださった文章、それから英語で記されている、最後に参考文献を書いていますけれども、*The Invention of World Religions* から主に学ばせていただいたことなんですけれども、1カ所重要なカ所がありましたので、引用しておきたいと思います。これは彼女が書いている文章のほぼ結論部分にあたります。「理性とは対照的に一神教は、それはますますセム的な傾向として描かれるようになっていくのだが、普遍性ではなく、むしろ排他性を象徴するようになっていった。アブラハムの宗教という、かつての一神教同盟は、こうした新しい思想の圧力に負けて、崩れはじめた。そして、この古いがれきのなかから突然立ち上がったのが、キリスト教ヨーロッパという新しい概念である。そしてこの混乱のなかで、世界の残りの部分は、もう一度シャッフルされ、配置し直され、やがて新しい地図のなかに描き込まれたのである」というふうに語っています。

つまり、もともとここで言っている一神教同盟というなかでは、キリスト教もユダヤ教もイスラームも、セム的な宗教であるにもかかわらず、そこから脱していく。つまり自分たちはセム的な起源にあるかもしれないけれども、それはむしろ



二次的なものであって、もっと直接的には、ヘレニズム的なものなんだ、あるいはアーリア的なものなんだというかたちで自己規定していきながら、同時に、ユダヤ的なもの、あるいはイスラーム的なものをセム的なものとして規定していくわけですね。これはどういうことかということ、セム的なものという言葉のなかでイメージされているのは、より原始的、プリミティブという意味です。アーリア的なものがより高次な文明をあらわしているとするならば、セム的なものというのは低次な文明とか価値を示している。こういった一神教同盟の解体というものが19世紀にあったという、このあたりがやばりのちのアンチセムティズム、あるいはこんにちの言葉で言うイスラモフォビアといったものが形成されていく思想的な土壌、あるいはディスコースとしてのいわば起源をこのあたりに認めることができるかと思います。

2) 「キリスト教世界」の終焉

「キリスト教世界」というふうに、いわばCorpus Christianumと呼ばれていたものが、しかしだんだんと解体していきます。これは当然、世俗化ということのなかで考えなければいけませんけれども、ちょっとここはもうあまり時間がありませんので、十分に触れないで次にいきたいと思います。ちょっと時間があれば読んでみてください。ごくごく一般的なことだけ書いています。ただ、世俗化を迎えたヨーロッパが、例えば世俗主義という原理、これを他の世界に押し付けようとするときに、さまざまな軋轢が生じる。すなわち「共存」を妨げる原因になっているということは、ここで指摘しておきたいと思います。世俗主義あるいは世俗文化、さらにはシノニムとしてのモダニズム、こういったものとキリスト教的な価値というものが非常に激しく葛藤する時代というものを、やはりキリスト教世界においても19世紀を迎えるわけですが、これが内的な葛藤だけではなくて、こういった世俗主義、あるいは政教

分離というものを、非西洋圏も持つべきなんだという考え方が外部世界との軋轢を引き起こしていくことになります。その意味では「共存」を妨げる一要件として、これも上げることができるかと思っています。

4. 「キリスト教世界」における創造と終末をめぐる言説

1) 創造の秩序 (Schöpfungsordnung)

① 西洋の場合

4 番目ですが、いわゆる「キリスト教世界」において、創造とか終末という言葉がどのように語られてきたのかということです。神学議論に少し入っていきます。もちろんこの神学のテーマというのは多岐に渡るんですけども、少し大胆な言い方をすると、この創造と終末、創造論と終末論という二つのテーマによってかたちづけられるベクトルの上に、他の初テーマというのはすべてマッピングすることができるだろうと私は思います。救済論とか、教会論、キリスト論、贖罪論とか、いろんな論が実際にはありますが、しかしここは一つの軸になると思います。その意味でこれを特化して取り上げているんですが、これからお話したいのは、先ほど言いましたように、創造という考え方があるから、それが「共存」を妨げていると私が言ったわけではなくて、妨げる場合もあったということを語りながら、そうでなかった場合もあるということを同時に語っていきます。

「共存」を妨げたもっとも大きな観念の一つが、「創造の秩序」という言葉です。これはドイツ語では、Schöpfungsordnung というふうに書いていきますけれども、これは実際、ドイツナチスのときの教会がしばしば用いた言葉ですけれども、起源はもっともっと古く、ギリシャ時代にまでさかのぼりますが、これはまず西洋の場合ですね。この結婚とか、家族とか、民俗、国家などの既存の社会的環境は、神によって定められており、キリスト者であるかどうかを問わず、すべての人間にあ



てはまるとも考えられた。自然の秩序に基づいて、既存の社会的システムを更迭する姿勢というのは、既にアリストテレスにおいても見られています。そして、これは宗教改革期においては、ルターによっても再確認されています。こういった「創造の秩序」が、ナチス・ドイツの反ユダヤ主義において用いられました。これはなぜアーリア人種は優秀なのか。これは神がそのように創造したからだということなんです、簡単に言ってしまう。それこそが神の秩序であって、これは人間がそのことをうんぬんかんぬん言う必要はない。アーリア人種がもっとも優秀なのは、創造の秩序に属することであり、その秩序の純粋性を疎外する要因があるとするならば、これは端的に言えばユダヤ人だったのですが、それは排除すべきであるという創造の秩序を掲げ、その純粋性を確保するということが反ユダヤ主義の根っこにあったわけであります。南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策、これはオランダ改革派教会が深く関わっているんですけれども、このオランダ改革派教会の神学的な理論のなかでも、主に使われているのが「創造の秩序」という考え方です。なぜ白人が支配すべきなのか。なぜアフリカーナとか、黒人たちが支配されるべきなのかというのは、これは人間が定めた理屈ではなくて、神が定めた秩序なんだから、われわれはそれを維持すべきであると。こういうかたちでアパルトヘイトを肯定化していったという経緯があります。これがまず「創造」という言葉が用いられた、つまり「共存」ということを妨げたもっとも大きい歴史的な事例の根っこに、この考え方があるということを指摘しておきたいと思います。

②日本の場合

日本の場合、こういった観念は直接的に適応されたわけではありませんが、戦時下の日本人クリスチャンにとっては、国体イデオロギー、あるいは大東亜共栄圏構想というものが、ある意味で

「創造の秩序」の役割を果たしたというふうに言うことができます。いわばこれを最高位の秩序、原理というふうに定めたわけです。それはキリスト教信仰と愛国心の「共存」を可能にはしましたが、たとえばアジア諸国の人々との「共存」を長く妨げる結果になったわけです。ですから、当時、日本的キリスト者といった言葉も生まれましたし、それは日本的な秩序とキリスト教信仰というのがまったく矛盾しないどころか、相補い合うんだという考え方がありましたけれども、これも広く言うならば、「創造の秩序」の一アジア累系にあるというふうに考えていったと思います。

2) 終末論

①西洋の場合

それから次、「終末論」なんですが、これは千年王国運動とか、そのあたりのことは、のちほど森先生から、アメリカに則して丁寧に説明していただきますので、それについては一切触れるつもりはありません。いずれにしてもこれはアウグスチヌス以降、この千年王国的な発想に非常に強く抑え込まれていくことになります。しかしずっとマグマのように、キリスト教史の底流には流れ続けてきて、現在のアメリカにおける宗教右派にも多大な影響を与えているということが言えます。

終末論については、私はこのへんが専門なんですけれども、細かい神学的な議論はいたしません。むしろここで参考文献として上げたのは、ジャーナリストが書いたもので、聖書的な起源、ここで「聖なる妄想の歴史—世界—危険な書物の謎を解く」という、世界—危険な書物というのはヨハネ黙示録のことです。つまりヨハネ黙示録がアポカリプス、黙示思想ですね、一番の基盤になっているわけなんですけれども、そういったものが単に聖書的な起源、あるいは歴史的にどうであったかというだけではなくて、現在の文化のなかで、例えば『レフト・ビハインド』というような非常によく売れた小説なども題材にしながら、こ



れが現在のアメリカの特に右派勢力にどれぐらい大きな影響を与えているのかということを語っているものであります。ちょっとだけ触れておきますと、1カ月ぐらい前だと思いますけども、アイザック・ニュートンの未公開の手記が発見されて、彼がこの終末論の研究者でもありました。そしてその未公開の手記を解読してわかったことは、もし早ければ、2060年にも世界は終わるであろうということをニュートンが予告しているんです。彼はいまの文脈を読んでいて、「創造の秩序」を研究した人です。しかし彼は世界のメカニズムを、物理的な対象の背後にある秩序を理解できると同じように、さまざまな歴史辞書を分析していけば、歴史のメカニズムも分析できる、あるいは類推できるというふうに考えたんです。その彼の聖書解釈に基づいて、2060年を世界の終わりというふうに定めたという文章があらわれています。ですから、近代科学の父と言われるニュートンにおいては、この「創造論」、それから「終末論」というのは、一体不可能のものとして結び付いていました。

それから社会的な側面、6ページのところですけれども、こちらのほうがむしろ大事だと思いますし、おそらく森先生も触れられると思うんですけれども、これは神学的に終末論というのは実はすごく面白いんですが、これが社会的にも変化をして、影響を与えていきます。一つは、創造と終末という、いわば基点と終点というものをキリスト教の歴史観は持っています。これは一神教にだいたい共通するんですけども、この直線的な歴史観というものがあるがゆえに、いまの時代より次の時代が必ず進歩する、あるいは昔よりいまのほうが進歩しているんだという進歩史観というものを、いわば副産物として生むことになりました。ですから結果的に、自分たちの社会の進歩だけではなくて、自分たちの社会とか文明と他の文明との比較のなかで、こういった終末論に基礎付けられるような進歩史観というものが、進歩史的

な文明観というものを同時に生み出していくことになります。これは比較するならば、仏教、イスラームの場合には、進歩史と言うよりは、むしろ退歩史と言ってもいいような、もともと例えば預言者の時代が一番黄金の時代、素晴らしい時代であって、あとはどんどん悪くなっていくというような歴史観もありますので、キリスト教の歴史観というのは、若干そういう特異な位置付けを持っているというふうに言えると思います。そしてそれが、いわば序列的な文明理解ということを生み出しますし、また19世紀に出てくる進化論、これを終末論の世俗化バージョンというふうに理解することができます。なぜならば、これはカルヴァンの予定説に代表されますように、終末論というのは、私の運命がいったいどうなるのか、死んだあと私はどうなるのかとか、あるいはこの社会、この歴史が、将来どうなるのかということを教えてくれるのが終末論であり、当然そのときには、「神が」という主語が非常に大事だったんですけれども、進化論は「神が」ということを抜きにして、この生物の起源とか来歴というものを説明する。そして同時に、社会進化論の次元においては、この社会とか文明の形成プロセスについても言及するようになってきますので、ここには思想的な連続性があります。実際これらが基になって、優生学的な人種差別、民族差別というものが起こることにもなりましたので、これもやはり「共存」を妨げる一つの要因として機能したということを指摘しておく必要があります。

②日本の場合

他方、そうではない場合もあります。終末論とか、そういったものはいつでもいかがわしく、そして何か人を悪い方向へ駆り立てにいったかという、そうばかりではなくて、内村鑑三の例をここでは上げておきたいと思いますが、内村の再臨運動というのは1910年代以降になりますけれども、彼の人生のなかで言うと、晩年にあたりま



す。内村は非戦論者として有名ですけれども、下に書いていますように、日清戦争のときは義戦論者だったんですね。戦争をすべき、つまり日本が戦争をして、きちんと勝つことによって、大陸も文明化することは意味があるじゃないかという、そういう意味での義戦論者だったんですけれども、それが結果的に、日本の単なる植民地主義政策、あるいは単なる帝国主義だということに気付くことによって、彼はその立場を改めていきます。しばしば内村は、この日清戦争以降、急に非戦論者に急にからっと変わったかのように語られる場合もあるんですが、実際にはそうではありません。彼はそういった立場を少しずつ自覚しながら、かなり段階的に変化していていますね。例えばのちに、米西戦争とかボーア戦争とか、そのころにもまだまだ戦争には意味があるということ、若干感じ取っているわけです。しかしそれもやはり戦争はおかしいということのをちに感じるなかで、彼は非戦論の立場をより明確にしていくんですけれども、その際に役に立ったのが再臨運動。再臨運動、再臨思想というのは終末論の一つなんですけれども、世の中の悪というのは人間自身でも変えることができないと。これは到底不可能であって、イエスが来臨することによって、いまの秩序が完全に改められて、そして新しい秩序になることによってしかこの世界は救済されえないんだという、こういった観念に立つことによって、彼は戦争をはじめとする人間の努力ということによって、平和を実現することはできないということを確認していくわけです。ですからこの再臨運動そのものは、いまのわれわれから見ると、少し荒唐無稽なイメージを持つかもしれませんが、しかし彼が非戦論を固めていくうえでは、非常に大きな役割を果たしていったと言えます。

それから、先ほどの創造論ということにもう一度返りますと、「創造の秩序」という点では、非常にネガティブなことばかりお話ししましたけれ

ども、神によって創造されたという原理に立つがゆえに、すべての人間を平等なものとして考えなければならぬという、そういった平等観念というものを同時に胚胎すると言いますか、含み持つことができますけれども、そういった両義性を一応示しておきたいというふうに思います。異なるどのような文脈、コンテキストかということによって、同じ創造とか終末という言葉がまったく違う作用をすることが実際にあったし、これからもありうるということでもあります。

5. まとめ

最後に、「まとめ」ですが、これはいま指摘してきたことですが、近代においてキリスト教世界という語に代表される西洋の世界認識が形成され、変化していくなかで、その内部とか外部、例えばヨーロッパの内部におけばユダヤ人に対する問題、あるいは外部においてはムスリムとか、そういった世界との「共存」可能性が著しく損なわれていったということが、いまの流れから確認できるのではないかなと思います。ですから、これはやはり19世紀に起こったヨーロッパの自己理解の変化、そしてキリスト教世界というものが、だんだんに解体していくなかで、そこから発せられるさまざまな摩擦熱というものが、同時に他の宗教や文明に対しても、非常に敵対的なものとして映っていく場合があったということでもあります。ですからこの観念、「キリスト教世界」という観念というのは、ただ観念にとどまらず、やはりそういう実態を伴っていたということでもあります。

そしてラッティンガー、それからトニー・ブレア、そういった人を少し紹介しましたように、いまなお西洋の価値規範、信仰と理性あるいは世俗主義、政教分離とか、そういったものが決定的に他に優位するものとして語られ続けているという現実があります。ですから、そういったものをどのように対照化していくか、相対化していくか、



部門研究 1 「一神教の再考と文明の対話」研究会

部門研究 2 「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会

そういったことの比較軸というものが、私たちには求められているのだと思います。これは神学の世界で言うならば、宗教の神学と言われる分野、それから19世紀の時点で、既にコンパルティブセオロジーという比較神学といったものも存在していましたけれども、コンパルティブセオロジーであるとか、あるいは宗教の神学、そしてコンティクシャルセオロジーが現代の神学のなかでもテーマ化されていますので、こういった営みというのは、いま継続されている最中であります。

それから3番目、創造や終末をめぐる言説は、暴力的・抑圧的に用いられた歴史的経緯もある

が、公平性や希望の言葉として機能させることもできる。そのようなポテンシャルティーを顕在化・現象化させる条件についての考察が求められるということです。ですからよく一神教が暴力的であるとか、戦争に好戦的だという、つまりそれは本質主義的な規定ではなくて、そういったことを実際に誘因させたり、現象化させるための条件はいったい何なのかということを、やはり緻密に切り分けて、分析していくことがわれわれにとっては必要だと思います。

これでちょうど1時間ぐらいになったと思いますので、私の話を終わらせていただきます。

何が文明間・宗教間の共存を妨げてきたのか？ ——「キリスト教世界」の創造と終末——

同志社大学 小原克博

1. はじめに

1) 方法論について

- ①「共存」の阻害要因が存在するとは考えるのではなく、むしろ、どのような状況において、ある要素が阻害要因として機能するかを考える。本質主義的には考えない。
(例) 一神教はただ一人の神を信じるから排他的である？
会衆派（組合派）教会は民主的である？
- ②キリスト教の「共存」の対象を一神教間だけに限定しない。また、キリスト教が非西洋世界において、どのように見られてきたのかを視野に入れることにより、西洋キリスト教の特質（問題点）を描写する。

2) 問題の所在

- ①「キリスト教世界」という観念が創造され終末（終焉）を迎える中で起こった変化
——現代の諸問題の直接の前提となっている19世紀以降の変化を中心にして
- ②「キリスト教世界」における創造と終末をめぐる言説

2. ケーススタディ

1) 西洋とキリスト教

- ①ヨーゼフ・ラッツィンガー
——『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』(*Dialektik der Säkularisierung: Über Vernunft und Religion*, 2004)を中心に
ユルゲン・ハーバーマスの討論（2004年）。翌年、ローマ教皇に。この文章（「世界を統べているもの——自由な国家における政治以前の道徳的基盤」）の中に、後に起こる数々の問題——「共存」を妨げているもの——の源泉が暗示されている。

2005年7月、教皇によるハリー・ポッター・シリーズへの強い懸念を表す書簡が公開された。欧米のメディアで報道され、話題になった。

2006年9月、レーゲンスブルク大学（ドイツ）での講義内容がムスリムからの批判を受ける。「ムハンマドが新たにもたらしたものは、邪悪で冷酷なものだけだ」（14世紀のビザンチン皇帝を引用）。講義のテーマは信仰と理性の関係についてであった。

2007年5月、ブラジルでの発言が現地の人々からの批判にさらされる。「福音を説くことでコロンブス到達前の文化の自主性を奪ったことはなく、外国文化の押しつけでもなかった」「先住民は聖職者の到来を歓迎した」と語ったことに対し、「虐殺や奴隷労働の歴史を無視した」と批判を受けた。

2007年7月7日、「1970年の改革以前のローマ・ミサ典書の使用についての自発教令」を発表。ラテン語ミサの復活。

2007年7月10日、声明「教会についての教義をめぐる質問への回答」を発表。カトリッ



ク以外の教派は「適切な意味では教会でない」とし、WCC、ルーテル世界連盟、世界改革教会連盟などから批判・懸念の声が発せられた。

「世界を統べているもの」において語られているポイント

- ・科学の暴走（原爆、生命科学）
- ・法の必要性
- ・人権（西洋の発明）、イスラームは西洋と異なる考え方を持っている。
- ・テロ（宗教による正当化）
- ・近代ヨーロッパに生じた二重の断絶（ヨーロッパ・キリスト教世界の外部世界との接触→諸国民の法、キリスト教世界内部の分裂→自然法、人権）
- ・異文化対話（キリスト教信仰と世俗の合理性は普遍性を持っていない）
- ・結論①宗教のパトロジー、理性のパトロジーを抑制するために、宗教と理性は相互関係の中に置かれなければならない。②それをインターカルチャルなコンテキストで具体化しなければならない。

「この相関性のなかで、さまざまな文化が理性と信仰の本質的な相関性を受け入れるようになれば、普遍的な浄化のプロセスが働きはじめ、そのプロセスのなかで最終的には、すべての人間がなんらかの感じで知っている、あるいは感じている本質的な価値や規範が新たな輝きを得て、世界を統べているものがふたたび人類において働く力となりうるのである」（46頁）。

②トニー・ブレア

——「テロとの戦いの本当の意味は何か」（A Battle for Global Values）を中心に（要旨）

イスラム過激派は、イスラム国家の近代化など望んではいない。彼らは、中東地域にイスラム過激主義の弓状地域を形成し、イスラム世界の近代化を目指している穏健派による小さな流れをせき止め、イスラム世界が少数の宗教指導者が支配する、半ば封建的な世界へと回帰することを望んでいる。彼らが攻撃に用いる手段に対抗するだけでなく、こうした彼らの思想に挑まない限り、勝利は手にできない。人心を勝ち取り、人々を鼓舞し、われわれの価値が何を意味するかを示すことが戦いの本質である。力の領域においてだけでなく、価値をめぐる闘いで勝利を取めない限り、イスラム過激主義の台頭というグローバルな流れを抑え込むことはできない（『フォーリン・アフェアーズ日本語版』2007年2月号、49頁）。

「イスラム過激派の戦略が明らかになったのは1990年代後半。「イスラム世界のなかで抗争を続けられれば、礼節を知り、公平さを重んじる穏健派イスラム教徒は過激派の思想を拒絶する危険があるし、その場合、イスラム教をめぐるイスラム教徒間の内戦になってしまう」。こう状況を読んだイスラム過激派は、イスラムの内戦とは全く異なる対立構図をつくり出す必要があると判断した。それが「イスラム対西洋の戦い」だった」（53-53頁）。

※実際には「イスラム対西洋」の図式は19世紀のヨーロッパにおいて形成された（後述）。

「われわれの価値観は西洋的なものではないし、ましてやアメリカ的、アングロサクソンのものでもない。それは人類社会が共有する普遍的な価値であり、地球市民が権利として持つべき普遍的価値である。この点を広くアピールする必要がある」（61頁）。



2) 非西洋とキリスト教：日本の場合

①島地黙雷（1838-1911、浄土真宗本願寺派）

「三条教則批判建白書」の提出（1872年、明治5年）

「欧州開化ノ原ハ教ニ依ラスシテ学ニヨリ、耶蘇ニ原カスシテ希臘・羅馬ニ基クハ、三歳児童モ知ル所ナリ。之ヲ教法ノ功ニ付セントスルハ、「ミシヨナル」家ノ私意ニ出ツ」（『島地黙雷全集』一、本願寺出版協会、1973年、25頁）。

→文明とキリスト教の区別。キリスト教なしに日本の「文明化」は可能であるという主張。

②井上哲次郎（1855-1944）

「上来論述せるが如く、耶蘇教の東洋の教に異なる要素は四種なり、第一、国家を主とせず、第二、忠孝を重んぜず、第三、重きを出世間に置いて世間を軽んず、第四、其博愛は墨子の兼愛の如く、無差別の愛なり、」（井上哲次郎『教育と宗教の衝突』敬業社、1893年、125頁）

→「日本的なもの」とキリスト教の区別。両者は「共存」し得ないという主張。

3. 「キリスト教世界」の形成と終焉

1) 「キリスト教世界」（Corpus Christianum）の形成

①初期教会論から「キリスト教世界」へ

キリストの体（σώμα Χριστού）

ローマ帝国の公認宗教となる。superstitio から religio へ。

教会が法制度的な統治機能を持つようになり、「キリスト教世界」が形成されていく。

②19世紀、ヨーロッパにおける世界認識の変化

ヨーロッパの自己理解は、そのイスラーム理解と表裏一体の関係にあった。

「ヨーロッパ」と「アジア」「オリエント」（18世紀まで）

→「ヨーロッパ」と「イスラーム」「イスラーム世界」（le monde musulman）

Cf. イスラーム主義者（たとえば、サイイド・クトゥブ）による「イスラーム世界」の強調（羽田 正『イスラーム世界の創造』東京大学出版会、2005年、196頁）。

③「キリスト教文明」

「ヨーロッパが「文明化の使命」を唱えるときに、自明のこととして「文明」とは「キリスト教文明」を指していた。その大きな流れにひと言だけふれておくならば、「狂信」と「独裁」と「野蛮」の温床であるイスラームという定式は、十九世紀初頭、ナポレオンのエジプト遠征あたりから、徐々に流通しはじめたものである。そのイスラームとの対比のなかで「キリスト教文明」は顕揚され、新しい人種イデオロギーと協同し、抵抗なく植民地主義的な言説に合体していった」（工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説』東京大学出版会、2003年、129頁）。

④「世界宗教」（Weltreligion）

19世紀初め頃の世界の人々の分類方法：キリスト教徒、ユダヤ教徒、マホメット教徒、無数の偶像崇拜者。

ただ一つの「世界宗教」としてのキリスト教



→仏教を第二の「世界宗教」として認める（仏教はアーリア系の宗教と考えられた）。複数の「世界宗教」へ。

同時代に、キリスト教をヘレニズム化あるいはアーリア化（脱セム化）し、イスラームをセム化しようとする傾向が強まっていった。

「[理性とは] 対照的に、一神教は——それはますますセム的な傾向として描かれるようになっていくのだが——普遍性（多数からなる全体を秩序立てて包含すること）ではなく、むしろ排他性（多数性の拒絶）を象徴するようになっていった。アブラハムの宗教というかつての一神教同盟は、こうした新しい思想の圧力に負けて崩れはじめた。そして、この古い構造の瓦礫のなかから突然に立ち上がったのが、キリスト教ヨーロッパ——あるいは、キリスト教の有無にかかわらずヨーロッパ近代——という新しい概念である。そして、この混乱のなかで、世界の残りの部分はもう一度シャッフルされ配置しなおされ、やがて新しい地図のなかに描き込まれたのである」（増澤知子「比較とヘゲモニー——「世界宗教」という類型」、磯前順一、タラル・アサド編『宗教を語りなおす——近代のカテゴリーの再考』みすず書房、2006年、146頁）。

2) 「キリスト教世界」の終焉

①世俗化（secularization）

もともとこの言葉は、宗教改革の時代に、教会の財産（土地や建物など）を行政に譲渡することを指して用いられ始めた。そこから、土地などが教会の支配から解放されるのと同様に、社会や文化が教会権力から解放され、キリスト教の影響が次第に減退していく現象を広く世俗化と呼ぶようになった。

しかし、1970年代半ば以降、世界的な「宗教復興現象」が起こることによって、世俗化論は根本的な見直しを迫られることになった。

世俗化を宗教の衰退ではなく、宗教の内面化・個人化として理解し直そうとした（宗教の「私事化」）。しかし、この考え方は、西洋型の政教分離（公的領域と私的領域の区分）を前提としないイスラーム社会においては成り立たない。

②世俗主義（secularism）

19世紀から20世紀前半までは、世俗主義は政教分離とほぼ同義に用いられてきた。今日、ムスリムが多数を占める国では、世俗主義は「脱イスラーム化」として理解される。

4. 「キリスト教世界」における創造と終末をめぐる言説

1) 創造の秩序（Schöpfungsordnung）

①西洋の場合

結婚・家族・民族・国家などの既存の社会的関係は神によって定められており、キリスト者であるかどうかを問わず、すべての人間に当てはまると考えられた。自然の秩序に基づいて既存の社会システムを肯定する姿勢は、すでにアリストテレスにおいて見られる。

「創造の秩序」は、ナチス・ドイツの反ユダヤ主義や南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策に大きな政治的影響を及ぼした。

秩序を強調するこのような考え方においては、既存の秩序を逸脱することは不自然で罪なことと考えられた。つまり、服従が秩序に関係するための唯一の正しい道とされた。

②日本の場合

戦時下の日本人クリスチャンにとって国体イデオロギー（大東亜共栄圏構想）が「創造の秩序」の役割を果たした。それは、キリスト教信仰と愛国心の「共存」を可能にしたが、アジア諸国の人々との「共存」を長く妨げる結果になった。

2) 終末論

①西洋の場合

a. 宗教的な側面

黙示的終末論、千年王国運動：教会によってしばしば抑圧・統制されてきたが、キリスト教史の底流にマグマのように流れ続けている。今日の米国・宗教右派勢力にも影響を与えている。

【参考】ジョナサン・カーシュ『聖なる妄想の歴史——世界一危険な書物の謎を解く』柏書房、2007年。

b. 社会的な側面

進歩史観を生み出した。Cf. 仏教やイスラームの退歩史観

進化論は、世俗化した終末論として理解することができる。神なしに人間や社会の来歴や運命を語ることができる。しかし、それが元になって進歩史的文明観や優生学的な人種・民族差別が生じた。

②日本の場合

内村鑑三（1861-1930）の再臨運動：「非戦論」を徹底していく役割を果たした。晩年には進化論も否定する。

内村は日清戦争のときには、それを「義戦」と見なす主戦論者であった。また、キリスト教は明治政府の近代化政策を補完する役割を果たすことができると考えていた。しかし、戦争に勝った結果、日本の植民地主義政策の中に内村が見たのは、利権を拡大しようとする帝国主義的拡張政策であった。つまり、義戦ではなく単なる侵略戦争に過ぎなかった実態を知ることによって、彼の戦争に対する理解は転換し、新約聖書の思想やクェーカーの思想の影響を受けて、次第に非戦論者としての立場を明確にしていく。

5. まとめ

- 1) 近代において「キリスト教世界」という語に代表される西洋の世界認識が形成され、変化していく中で、その内部（たとえば、ユダヤ人）および外部（たとえば、イスラム）世界との「共存」可能性が著しく損なわれていった。
- 2) しかし、今なお、西洋（キリスト教）の価値規範（たとえば、信仰と理性、世俗主義）が他に決定的に優位するものとして、宗教・政治の指導者たちによって語られ続けているという現実がある。その問題性は非西洋の視点から、よく見える場合がある。
- 3) 創造や終末をめぐる言説は、暴力的・抑圧的に用いられた歴史的経緯もあるが、公平性や希望の言葉として機能させることもできる。そのようなポテンシャルティを顕在化・現象化させる条件についての考察が求められる。



部門研究 1 「一神教の再考と文明の対話」研究会

部門研究 2 「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会

【参考文献】（主要なもののみ。文中で記した文献は除く）

Tomoko Masuzawa, *The Invention of World Religions: Or, How European Universalism Was Preserved in the Language of Pluralism*, The University of Chicago Press, 2005.

Oskar Köhler, "Corpus Christianum," *Theologische Realenzyklopädie*, Bd.VII, S.206-216.

芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001年。

山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会、1999年。

「千年王国」とアメリカの使命

同志社大学大学院神学研究科教授

森 孝一



今日は『千年王国』とアメリカの使命』タイトルで、「共存を妨げるもの—キリスト教の場合—」の一つの例として、特にアメリカに限定をしてお話しさせていただきたいと思います。

アメリカとイスラーム世界の対立、共存を妨げているものは何かということについて、まず考えてみたいと思います。一つ目は、先ほどの小原先生のプレゼンテーションにもあったように、普遍的な理念というものを広げて行くというアメリカの立場があります。自分たちが正しくて、自分たちの理念は普遍的であって、これをイスラーム世界に力を用いてでも広げていくのだという考え方。これが一つあると思います。もう一つは何かというと、パレスチナ・イスラエル問題で、アメリカが常にイスラエルを支持していること。この二つはどちらもアメリカのキリスト教、アメリカの「civil religion（見えざる国教）」とい深い関係がありますので、今日はそのことについて、特に「千年王国思想」と、「アメリカの使命」ということに焦点を絞りながらお話をさせていただきたいと思います。

最初に、普遍的な理念についてですが、当研究会においても、私は今まで何度もお話ししたと思うのですけれども、ベトナム戦争と現在のイラク戦争を比較してみたいと思います。ベトナム戦争当時の国防長官であったマクナマラが、20年後に『回顧録』を出しています。そのなかでアメリカが大失敗を犯した主要な理由を11項目にわたって書いています。そのうちのいくつかを見てみたいと思いますが、「地域に住む人たちの歴史、文化、

政治、さらには指導者たちの人柄や習慣についてのわれわれの深刻な無知。」5項目目は、「通常のタイプと違う、極めて強い動機を持った人々の運動と対決した際、」この場合は北ベトナムなどの共産主義者を言っているわけですが、今日では、アメリカにとってこれはムスリムと考えていいかもしれません。「アメリカの持つ近代的でハイテクを駆使した装備、兵力、それに軍事思想の限界を認識していませんでした。われわれはまた、自分たちとはまったく異なる文化を持つ人たちの、心からの支持を獲得する任務に、軍事技術を切り替えていくことにも失敗しました」。すなわち、ハードウェアからソフトウェアへの切り替えにも失敗した。8項目目に、「アメリカの国民もその指導者たちも、全知の存在ではないことをわれわれは認識していませんでした。すべての国家をアメリカ自身のイメージとか、われわれの好みに従って作りあげていく天与の権利をわれわれは持っていません」というように、現在のアメリカの中東政策、イラク政策に対しても、辛辣な批判の言葉となるようなことを語っているわけです。

ところが、同じこの『回顧録』のなかでマクナマラは、これと矛盾する発言もおこなっています。「ケネディ、ジョンソン両政権で、ベトナムについての決定に参加をしたわれわれは、この国の原則と伝統と考えるものに従って行動しました。これらの価値観に基づいて決定を下したのです。われわれは価値観や意図についての過ちではなく、判断と能力による過ちを犯したのだと、私は心から信じています」。このように語っている



わけです。すなわち、ベトナム戦争の大義は間違っていなかった。間違っているとするならば、それは判断と能力。すなわち戦略と実行力において間違っていたのであって、ベトナム戦争の意図、大義は間違っていなかったと言っているのだと思います。結局、アメリカがベトナムから撤退したのは、戦死者の数がベトナム戦争の大義と比較したときに、そのバランスが釣り合わなくなったために撤退した。それではイラク戦争の場合はどうなのか。おそらくアメリカはイラクから将来撤退するだろう。先日、祇園祭の夜にミシガン大学のコール教授が講演をなさった時、彼ははっきり期間を限定して、「2年以内にアメリカは撤退するのではないか」と言っておられた。それでは、撤退したのちにアメリカはこのイラク戦争をどのように考えるのだろうか。マクナマラが『回顧録』を書いたように、もしブッシュが『回顧録』を書くとなると、どのように書くのだろうかと考えてみると、やはりマクナマラと同様に、「大義は間違っていなかった。間違っていたのは戦略であった」と言うのではないか。もしそうだとするならば将来、第2、第3のイラク戦争、ベトナム戦争がまた起こる可能性は十分に考えられるわけであって、われわれがここで考えなければいけないのは、アメリカの戦争の大義についての分析、省察ではないかと考えます。

さて、五百旗頭真先生が、外交を決定する3要素として、「力の均衡、経済的国益、普遍的理念」ということを、あるところでおっしゃっています。普遍的理念を強調する立場とは、村田先生がたびたびこの研究会でお話をしてくださっている、アメリカの外交の五つのパターンのうちのウィルソニアン的なパターンだと思います。どうして他国以上にアメリカは普遍的理念が、外交政策を決定する場合の大きな要素になるのだろうかということについて考えてみたいと思います。

普遍的理念が外交を決定する一つの要素になるのかということを考えてみますと、これは何も外

交だけではない。内政の場合もそうであって、大統領選挙において中絶の問題だとか、同性婚合法化の問題がイシューになるということ自体が、これが普遍的理念、価値観というものが、政治における大きな要素になっているということだと思えます。私はそれは、人間存在の本性に関係しているからではないかというふうに、常々考えているわけです。人間というのは意味を求める存在です。これはほかの動物に見られない人間の本性です。私が存在する意味はどこにあるのかと。私たち、あるいは私たちの社会、国家が存在する意味はどこにあるのかということ問うということは、人間が本性として持っているものではないかと思うわけです。アメリカの場合、その存在の意味というのをどこからくみ取るかというと、文化だとか民族というものからくみ取れない。アメリカは移民による多民族国家であるために、「理念」というものに存在の意味を見出そうとする。それが建国の理念であると思えます。

ここで視点を変えて、「アメリカ外交とアメリカの海外伝道の類似性」ということについて、お話をしてみたいと思います。1997年に私が編集しました、日本国際問題研究所から出した『アメリカと宗教』という論文集があるのですが、そのなかに現在、東京女子大学の教授でアメリカ研究家の小檜山ルイさんが、「海外伝道と世界のアメリカ化」という論文を書いてくださっています。そのなかで小檜山さんは、「モンロー主義を放棄して、積極外交へと展開していったアメリカは外交において、それまであった海外伝道のレトリックを利用した」ということを指摘しております。すなわち自分たちの海外進出はヨーロッパとは違うのだというエクセプションリズム（アメリカ例外論）を、宣教師のレトリックを持ってくることによって説明しようとした。われわれの海外膨張は植民地主義ではない。領土的野心ではなく善意からおこなうものであるというレトリックです。アメリカは国土が大きいですか



ら、領土などというものはおそらく必要がなかったものであって、必要であったのは海外マーケットであったと思います。これを当時変な言葉で言われたのですが、「Imperial Anti-colonialism（帝国主義的反植民地主義）」という言葉が使われていました。いまならまったく意味をなさないような言葉なのですが、実はこれは、ほとんどアメリカ世論全体にサポートされていたということが分かっています。これに反対をしたのは本当に一握りのコミュニストだけであって、右から左まで全部このレトリックを支持していたということが分かっています。

その代表的な例が、当時のマッキンリー大統領が、モンロー主義を捨ててフィリピンへと出兵したときのことを思い出して、のちに20世紀になってから書いているものなのですが、「私は毎晩夜中までホワイトハウスのなかを歩き回っていた。私は幾晩も全能の神に光と導きを祈った。そしてある晩遅く、次のように神の光と導きが示された。それがどのようにして示されたかは私にはわからない。しかし確かに示されたのだ」というふうに語りまして、四つの選択肢を述べるわけです。1から3について、「それは全部正しくない」と述べて、最後4番目に、「残されている道は、フィリピン人を教育し高め、文明化し、キリスト教化するために、アメリカがフィリピンを統治することである」と。自分たちで統治することができるようになるまで、アメリカが守ってやるんだという考え方であって、そして最後に彼は、「こうして私はベッドに入り眠りについた。そしてぐっすりと眠ることができた」という言葉で締めくくっています。

この「教育し、高め、文明化し、キリスト教化する」という意識は今日まで変わっていないのではないかと。このフィリピン人というのを、例えばイラク人に置き換えた場合に、イラク人を「教育し、高め、文明化し、キリスト教化する」とはいまは言わないでしょう。しかし「民主化する」と

言うのではないのでしょうか。そして「彼らが民主的に自分たちを統治できるまで、アメリカがイラクを統治するのだ」というこのレトリックとは、今日もまったく変わっていないのではないかと思います。

海外伝道について言えば、アメリカは19世紀の後半から20世紀の初めにかけて、盛んにアジア、アフリカに出て行くわけですが、海外伝道を推し進めた一つの大きな力として、「reflex influence」というものがあったのだということを、小檜山さんは指摘しております。「反射の影響」と翻訳されていますが、海外伝道において、現地での成功を見ることによって、自らの信仰の正しさを確認して、信仰心が高まっていく。だからますます熱心に海外伝道をおこなって、そこで成功をさせるということが必要になる。それが自分たちの立場というものを確認することなのだ。実はこれはアメリカ外交においても見られることなのではないか。すなわち、アメリカが世界に拡大していくことにおいて、そこで成功を収めることによって、自分たちが持っている、推し進めようとしている普遍的理念の正しさというものを確認していく。こういうところがあるのではないかと。ということになると、もしそれが失敗したらどうなるのかということです。ベトナム戦争で敗北する。それは「reflex influence」の反対であって、そこで失敗をしているのだから、自分たちの正しさというものが否定されることになる。それと同じことがイラク戦争においても起こってきているのではないかと思うわけです。

それでは、イラク戦争の問題について考えたいと思いますが、イラク戦争の大義、そしてそれが持っている宗教的意味、レトリックについて、ブッシュ大統領の二つの演説を紹介してみたいと思います。

一つ目は、2003年1月18日、イラク戦争が始まった年の一般教書演説。二つ目は、2002年9月11日のブッシュの演説です。一つ目のほう



は肉声を入れていきますので、お聞きください。
〈ブッシュ演説音声「… freedom ever the every nation.」〉非常にエモーショナルな発音をしていますね。特に「自由というのはアメリカが世界に与えるものではなくて、神が人類に与えるものである」の最後の「神が与えるものだ」という箇所では、ある種、感極まったような雰囲気です。もう一つの演説では、「自由と平等を私たちに与えたのは創造主である」というように、アメリカの使命というものが神によって与えられているのだと語っています。実はこのようなアメリカの普遍的理念、アメリカの建国の理念を、宗教的な用語によって語るというのは、独立宣言以来の伝統であるということが言われております。「すべての人間は神によって平等につくられ、一定の譲り渡すことができない権利を与えられており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている」という中心部分でありますけれども、ここで語られていることは啓蒙主義の理念である基本的人権についてです。基本的人権について語るには、「神」を持ち出さなくても表現できるわけです。例えば、「すべての人間は平等であり、一定の譲り渡すことのできない権利を持っており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれる」と言ってもいいのに、わざわざ「神によって平等につくられ」、あるいは「権利を与えられており」という宗教的表現を用いたのはなぜか。当時アメリカ国民の大半、100%がおそらくクリスチャンでしょう。クリスチャンのなかには多様性があったと思うのですが、彼らにとっては、基本的人権なり啓蒙主義の思想を生で表現されるよりは、いま見ましたような聖書的な表現にしてもらった方が、より受け入れやすい、よりふさわしい表現であったからではないか。結局、今日に至るまで、独立革命からイラク戦争まで、アメリカが一貫して戦争の大義、自由と民主主義を世界において実現していくことの源流はアメリカ革命にあったのではない。しかし考えて

みると、この建国の大義、啓蒙主義、基本的人権というのはフランスも同様であるわけなのに、フランスにアメリカほどの強い世界に対する使命感というものがあるのかと考えると、先ほどの小原先生の発表のなかで、それが一部あったということは指摘されたと思いますが、それが今日まで継続して存在してきたとは思えない。アメリカの場合それがずっと継続しているとの、いったいなぜなのだろうか。実はアメリカの使命感というのは、その源流は、アメリカの独立宣言、あるいはアメリカ革命ではなくて、ピューリタニズムにあるのではないかと、今日は考えてみたいと思うわけです。そして、これが実はアメリカ宗教における「共存を妨げるもの」の源流でもあるということをはっきりとしてみたいと考えています。

「ピューリタニズムとは何か」ということについて、少しお話をしたいと思います。ここにいる院生諸君は、「あ、クラスで聞いたような話だな」と思うかもしれませんが、まあ聞いてください。ピューリタニズムはイギリスの宗教改革の一つであって、イギリスの宗教改革というのは「上からの宗教改革」と「下からの宗教改革」があります。「上からの宗教改革」とは国王主導によるバチカンからの分離独立、すなわち英国国教会の成立です。「下からの宗教改革」とは英国国教会の宗教改革は不徹底だったと考え、英国国教会をより徹底した宗教改革の精神によって改革しようとするものであり、これがピューリタニズムです。ピューリタンやピューリタニズムの語源は「ピュア (pure)」あるいは「純粋にする」という「ピュリファイ (purify)」です。ピューリタンとは、英国国教会を宗教改革の原理に従って、よりピュアにしようとした人々であったと、言うことができると思います。

画面のポートレートはジャン・カルヴァンです。英国国教会をつくったヘンリー8世はチューダ王朝の第2代なのですが、ご存じのように妻



キャサリンとの離婚問題を契機にして英国国教会が成立してきます。ヘンリー8世とキャサリンとのあいだにできた子供のうちでメアリーだけが成人まで成長しました。ところが両親の結婚が正式でなかったというので、英国国教会成立後はいわゆる「私生児」の扱いを受けます。ヘンリー8世の後を次いだのはエドワード6世ですが、彼は10歳で王位に就き、わずか16歳でこの世を去ります。そこでメアリーに王位が転がり込んでくるわけです。メアリーは非常に苦しい少女時代を送っていますから、自分がなぜこんな苦しみを受けたのだろうか考えた結果、あの宗教改革が悪かったからだというので、もう一度カトリックに戻していくわけです。プロテスタントのリーダーたち270名ほどが焼き殺されました。ここからブラッディ・メアリー（血に飢えたメアリー）というカクテルの名前が出てきていると言われています。殺されなかった多くのピューリタンのリーダーは大陸に逃げていった。大陸へ逃げてどこへ行ったかという、主なる逃げ場所がジュネーブだったわけです。カルバンのもとで「ジュネーブ・アカデミー」で宗教改革の教育を受けます。ですからピューリタンというのは、カルバンの影響を強く受けている人々なのです。

カルバンの有名な教理に「予定説」があるわけです。先ほど小原先生もちょっとお話をされましたが、「予定説」というのはいったいどのような教理かというと、これは宗教改革のキリスト教理解を究極まで徹底して表現したものと言ってもいいと思うのです。プロテスタントのキリスト教理解の中心は「人はどのようにして救われるか」ということです。教会によってではない。人間の努力によってではない。神の一方的な恵みによってのみ救われるのだ。これがプロテスタントの原理です。これを福音主義といいます。これを別の言葉で表現をすれば、それは誰が救われるか、誰が減びるかということは全部神さまの御手の内にあるのだということになります。すなわち、

予定のうちにあるのだというのが「予定説」なのです。ところが、カルバンは面白いことを言っています、「誰が救われるか、誰が減びるかということは人間には分からない」。分からないのですから、私たち人間にできることは、神様に任せるしかない。カルバンが言いたかったことはそういうことだと思うのです。

ところがピューリタンはこの予定説の、この「人間には分からない」ということに耐えられなかった。ピューリタンがどのように考えようとしたかというと、「いや、そんなことを言うけれど、救われる人には『目に見える印』があるのではないか」と。そこで外から見ても救われた者とわかる人たちを「Visible Saints」という言葉で言いあらわしていったわけです。そして、ピューリタンはこの「印」を自分のものにしようと努力した。これがピューリタンの信仰の三つの特徴になるわけです。一つ目は、キリストによって救われたという宗教体験（回心体験）です。この回心体験の有無にピューリタンたちは非常に神経をとがらせました。そしてアメリカのニュー・イングランドでは、回心体験があるかどうかということの吟味に、1年ぐらいを要するというようなことまでやっているわけです。そして、回心体験のある者にのみ、参政権を与えてニュー・イングランド植民地もありました。ピューリタンの信仰理解の第二の特徴は、救われた者として、神の恵みへの応答として、正しい生活ができているかどうかを問題にしたことです。神への応答は個人のレベルと社会・国家のレベルという二つのレベルにおいて問題にされました。この2番目の社会、国家のレベルにおいても正しくあらねばならないという点、これがピューリタンの非常に独特のところだと思います。個人のレベルでは、マックス・ウェーバーが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で明らかにしたように、自分の生活において非常に節約していく。同時に、天職としての自分の仕事は神から与えられたものであ



ると信じ、自分の天職において成功することが、神に選ばれていることの「印」の一つだと考えた。がんばって働き、そして節制して贅沢を戒める。そこに資本の蓄積がなされてきたというのが、マックス・ウェーバーの論ですが、これは個人のレベルの神への応答です。社会・国家レベルにおける神への応答が具体的に現れたのが、イギリスにおいてはこのピューリタン革命であり、アメリカのニュー・イングランドでは「Holy Commonwealth」、すなわち、ニュー・イングランドの聖書的政治体制の設立であると思います。

もう一つのピューリタンの信仰理解の特徴は、あまりよく知られていませんが、実は今日のお話と一番深い関係における「千年王国」への信仰です。自分たちは歴史における「終わりの時を生きている」という認識です。そのような意識を、イギリスとアメリカのピューリタンもほぼ全員が持っていたということが明らかになってきています。

ニュー・イングランドの「Holy Commonwealth」の典型的な例としてのマサチューセッツ湾岸植民地を作った指導者ジョン・ウインスロップ (John Winthrop)」の演説を紹介しようと思っておりましたが、時間の関係でここでは省略します。ただ、この演説のなかで「イスラエルの神がわれわれのただなかにいます」だとか、「新しい英国」だとか、あるいは「丘の上のまち」というような、のちのアメリカのナショナル・アイデンティティーの核になるような表現、用語がみられるということだけ指摘しておきたいと思います。

次に、ニュー・イングランドですが、ニュー・イングランドといっても決して一様ではなかった。その多様なニュー・イングランドの両極にあった二つの植民地が、ロジャー・ウィリアムス (Roger Williams) がマサチューセッツから追放されてつくったロードアイランド——現在のロードアイランド州ですけれども——と神権政治の代表であるマサチューセッツ湾岸植民地でしょう。この二つの植民地のあり方を比較して、ニュー・イ

ングランドの多様性について見ていきたいと思います。

ニュー・イングランド植民地に多様性があったということが、のちのアメリカ合衆国の多様性をつくっていくわけで、ロジャー・ウィリアムスがマサチューセッツの神権政治 (Theocracy) を批判したことが、のちのアメリカの政教分離の原型をつくり出していくわけですね。多様性を最大限に容認しつつ、同時に多様なものを統合していかなければならない。これが「アメリカの宿命」としてあるわけです。モニターに映っているのは、現在使用されているセントコインです。25セントコインだけではなくてすべてのコインに刻印されているのですが、「E PLURIBUS UNUM」というラテン語があります。英語に直すと「From many one」、すなわち「多くのものから一つが生じるんだ」というモットーが書かれています。そのコインを裏返しますと、「IN GOD WE TRUST」という20世紀になってからつくられた標語が刻印されています。これについて、今日司会をしてくださっている三宅先生が翻訳されたマーティン・マーティー (Martin Marty) の、*The Public Church* のあとがきに次のように書かれています。「多様性を重んじながら統一を生み出すこと。個人の信教の自由を守りながら、国家全体の存在を神に根拠づけることは、アメリカ建国期からの課題であった。したがって、アメリカにおける政治、あるいは宗教に関心を抱くものにとっては、この多様性と統一および個人の信仰と社会の秩序という問題は、避けて通ることができない課題だ」と。この多様性を重んじながら統一を生み出すということと、個人の信教の自由を守りながら、国家全体の存在を神に根拠付ける。これを同時に成り立たせていかなければならない。これがアメリカの独特の課題であるわけです。アメリカの宗教においては、この多様性と統一の問題はどのようなになっているのか。「多様性を認める」というのは、憲法修正第一条で「政教分離」を定めて国教制度



を否定し、「信教の自由」を認めるというかたちで制度化されています。国家統合については、私の言葉で言えば「見えざる国教」によって多様なものを統一していくという、二つの在り方がアメリカの宗教のなかにある。それをニュー・イングランドで言うと、「多様性を最大限容認する」ことを代表するのがロードアイランドであり、「社会統合」を代表するのがマサチューセッツでありました。アメリカはロードアイランド的なものとマサチューセッツ的なものを、同時に成り立たせて行かなければならないという宿命を持っているのだということが言えるのではないかと思います。

次に、「千年王国」への信仰に入っていきたいと思います。千年王国思想には「前千年王国思想」と「後千年王国思想」があるのですが、「前千年王国思想」についてはあとで説明します。今日は特に、「後千年王国思想」との関係で、「世俗的千年王国思想」についてお話をしたいと思います。まず、ヨハネの黙示録20章を読んでみます。

私はまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降ってくるのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。

すべての災い、艱難というものは、このサタンによって起こされているというふうに、当時は考えられていたわけで、そのサタンが千年間縛られて、淵のなかに沈められているということは、千年間非常に幸福な期間が続くということになります。そのような千年王国が終末が到来する以前に実現するという信仰です。さきほど申しましたように、千年王国についての理解のなかに、前千年王国思想と後千年王国思想がある。何が違うのかというと、それは「キリストの再臨」と「千年王

国の実現」の前後関係です。どちらが先に来るのかということで二つの考えがある。前千年王国思想というのは、キリストが先に再臨し、その後に千年王国が実現する。キリストが再臨してこの世を裁いたのち、キリスト自らが千年王国を実現するという思想です。小原先生が先ほど紹介された内村鑑三の終末思想は前千年王国思想への信仰の一例です。それでは、後千年王国思想というのはどういうものかということ、千年王国を実現するのはキリストではなくて、人間なのです。教会あるいは神の民、それはキリスト教国家である場合もあるわけですが、その努力によって千年王国は実現し、千年王国が実現したのちに、キリストが再臨するんだというのが後千年王国思想なのです。

では17世紀のピューリタンたちの場合はどうであったのかというと、イギリスのピューリタンもニュー・イングランドのピューリタンも、例外なく前千年王国思想です。彼らの関心は何であったかということ、それは千年王国ではなくてキリストの再臨なのです。キリストが再臨してわれわれが裁かれるわけですから、裁きに耐えられるような純粋な教会と国家を実現しなければならないと考えた。これが第一世代のピューリタンたちの関心事であったと思います。

ところが、このアメリカにおける千年王国理解が変化していくのです。その変化のターニングポイントになった人が、ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards) という人なのです。アメリカ革命の直前、1730年代から1740年代にかけて、全ニュー・イングランドを巻き込んで、第一次大覚醒運動が起こってきます。その理論的神学的な指導者が、ジョナサン・エドワーズなのですが、彼がそれまでの第一世代の前千年王国思想を後千年王国思想に変えた人物であると言われています。

第一次大覚醒運動の実践的な指導者にジョン・ホイットフィールドというイギリスの説教家いま



す。彼はニュー・イングランドの全植民地を巡回して悔い改めをもとめる説教を行っていきました。ボストンで彼の集会には、当時、ボストンの人口3万人であったのですが、1万5千人が集まったと記録されています。それぐらいの規模で全ニュー・イングランドを巻き込んだかたちで大覚醒が起こった。エドワーズはこの第一次大覚醒を千年王国が実現しつつある印であると考えました。それだけにとどまらず、彼はイギリスやヨーロッパの知り合いに手紙を出して、「おまえのところはどうだ。何が起きている」という情報を集めていくわけです。そしてヨーロッパ全体で宗教復興が起こりつつある、すなわち千年王国が到来しつつあるのだという情報を得ようとするわけです。すなわちエドワーズの関心事は、先ほど述べた第一世代のピューリタンの関心事がキリストの再臨であったのに対して、千年王国の到来、あるいはその印の確認であった。エドワーズ以降のアメリカにおいては、その千年王国思想への信仰は、一部の例外を除いて、ほぼすべてが後千年王国思想に変わっていきました。後千年王国思想、すなわち千年王国を実現していくうえでの「アメリカの使命」というとらえ方が、このあとなされるようになっていきます。

実はこの千年王国的考え方というのは、アメリカが独立するときにも非常に大きな力になりました。モニターに写っている人物はトマス・ペインという人物であって、この右側にあるのは彼が書いた『コモン・センス』という著作です。1776年に書かれたものであって、当時ニュー・イングランドの人口250万であったところで、30万売れたというわけですから、いま日本でいうと1千万部を超える超ベストセラーというふうに考えてもいいと思います。『コモン・センス』は「イギリスから独立しなければいけない」ということを、アメリカの庶民に向かって語っています。トマス・ペインという人は、じつは非常に世俗的で、反キリスト教的な人物です。ところがこの『コモ

ン・センス』のなかでは、千年王国的な用語を使って、人々を説得しようとしています。すなわち世襲的君主制すなわちイギリスの王政に見られるような世襲的な君主制というのは反聖書的であるというようにイギリスを批判している。その理由は、トマス・ペイン自身が大覚醒の実態を見ていて、民衆の心をとらえるためには、千年王国的な表現が必要だと認識し、『コモン・センス』を書いたのではないか。

もう一つが「ケベック法（1774年）」です。いまのケベックはカナダにありますが、ここでいうケベックとはニュー・フランスのことです。ニュー・フランスというのはどこかというところ、一番南がニューオリンズ。そしてミシシッピ川沿いにずっと細い地帯で上がって行って五大湖、それから現在のアメリカ合衆国の国境を越えて、現在のケベック、これがニュー・フランスです。ニュー・イングランドの外をずっと囲むようなかたちでニュー・フランスが存在していた。ニュー・イングランドは常にニュー・フランスと争っていたわけです。「目の上のたんこぶ」のような存在です。当時ニュー・イングランドの人々は、ニュー・フランスに勝利することは、すなわちニュー・フランスの宗教であるカトリックに勝利することだと考えていました。ここが重要なのですけれども、カトリック教会とフランスというのをダブらせて、カトリックはローマ教皇をいただく反キリストだというレトリックです。ニュー・フランスに勝利することは、千年王国の到来の一つの印であると考えていた。ところが、1763年に「フランス・インディアン戦争」(French and Indian War)が始まりました。ニュー・フランスとインディアン連合とニュー・イングランドが戦って、ニュー・イングランドが勝利を収めた。これによって現在のアメリカ合衆国からはフランス勢力がなくなるわけです。残ったのはケベックなのですが、ケベックをどういうふうに扱うかということで、ニュー・イングランドとして



は、ケベックをニュー・イングランドに併合して、領土を広めてくれたらいいと思っていました。しかし英国本国はそれをやらずに本国イギリスの直轄にしてしまったのです。直轄にしてしまっただけではなくて、ケベックの国教であったカトリックを、そのままケベックの国教として認めるという決定を行いました。これが「ケベック法」です。英国本国から見ると、べつに宗教なんかどうでもいいわけで、統治しやすいほうがいいわけだから、そのようにしたのだと思います。ところが、ニュー・イングランドから見ると、この戦い自体が終末論的な意味を持っているわけで、いままではフランスとカトリック教会だけが反キリストであったのが、「ケベック法」を認めた英国本国が終末における反キリストになってくる。

この千年王国的な理解というものが、アメリカの独立革命にも非常に大きな影響を与えていきます。千年王国思想に見られる二元論的な世界観について、いまお話をしました。キリスト陣営と反キリスト陣営という二元論ですが、先ほどのヨハネの黙示録は、そのようなかたちで世界を二元論的にとらえているわけで、いま独立革命におけるキリスト陣営、反キリスト陣営という話をしました。ところが独立革命以降は、これが「世俗的千年王国論」というかたちになって、二元論的世界観と枠組みが継承されていきます。そしてアメリカがキリスト陣営の中核になっていく。この「世俗的千年王国論」という言葉は、斉藤眞先生がお使いになっている言葉です。これが冷戦期になるとキリスト陣営が自由主義陣営であり、反キリスト陣営が共産主義陣営であり、反キリスト陣営のトップがソ連であるというかたちになりますが、冷戦後は、反キリストのイメージとイランのイメージというのが強く重なっているのではないかと思います。それはカトリックとシーア派の類似性というか、いわゆる教皇とアヤトラです。民主的政治体制の上に絶対的な権威というものが存

在している。民主主義体制あるいは共和制の上部に神以外の権威がそんざいするというあり方をアメリカは「反アメリカ的」なものと受け取ります。

まとめてみますと、前千年王国主義者であったピューリタンの関心は、キリストの再臨に備えるために、純粋な教会と純粋な社会・国家を形成することであって、外に向かったの使命感というのではないのです。ところがジョナサン・エドワーズ以降の後千年王国思想になると、アメリカに特別な終末論的役割、使命感が与えられて、関心が世界に向いていったということが言えるのではないかと思います。

時間がなくなってきましたので、ここで急ぎたいと思います。今日の問題に移ります。第2番目のイスラエル、パレスチナの問題ですが、「クリスチャン・シオニスト (Zionists)」の問題です。宗教右派は信仰の立場でいうと、前千年王国主義者なのです。ところが彼らはイラク戦争を支持するし、パレスチナ・イスラエル問題にも積極的に発言しています。これはどういうことなのか。前千年王国主義者の関心というのは、外へ向かわないのではないか。アメリカにおける前千年王国主義者は変化したのだろうか。もし変化したとすれば、その原因となったものは何か。

それはイスラエルの建国です。1948年のイスラエルの建国によって、アメリカのファンダメンタリスト、すなわち前千年王国主義者は激変した。それは「ディスペンセンシヨナリズム (dispensationalism)」の理解において起こりました。ディスペンセンシヨナリズムというのは、先ほどの小原先生のご発表で、「創造と終末」ということを言われましたが、創造に始まり終末に終わる、この歴史です。これを「神による救済の歴史」としてとらえる。これが聖書的な歴史観で「救済史」と呼ばれるものです。その救済の歴史全体を七つの段階に分ける。そのそれぞれが「ディスペンセーション (dispensation)」です。そして現在はその最後の段階にあるというわけです。最後



の段階ではヨハネの黙示録に書かれてあるように、散らされていたイスラエル（ユダヤ人）が、パレスチナに帰ってくると書かれてある。その予言と具体的なイスラエル国の建設というものを重ね合わせて、文字どおりディスペンセンシヨナリズムの実現として見ていく。じつはこれは先ほど申し上げた「影響の反射」と同じなのではないか。すなわち宣教師たちが、宣教が成功することによって、自分たちの信仰の正しさを確認することと同じように、イスラエル国が建国されたということは、実は聖書の予言（ディスペンセンシヨナリズム）は正しいということを証しているのではないかと理解するようになってくる。イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリストの関心は、「地球が造られてから6千年」だとか、「キリストの処女降誕」など、過去の事柄が彼らの関心事であったのに、イスラエルの建国以降は現在と将来が関心事になってきています。アメリカのファンダメンタリストにおいて、このような大きな変化が起こったのだと思います。

それではユダヤ人の建国と帰還の次に起こるものは何か。「ディスペンセイシヨナリスト（dispensationalists）」はどう考えているかというと、それは神殿の建設です。第三次のエルサレム神殿の建設。現在あそこには「岩のドーム」が建っているわけで、それを打ち壊し、そこに神殿を建てていく。その実現を目指している団体がいくつもあるわけで、その代表的なもので「Temple Mount Foundation」です。これはべつに特異な人々によって構成されているわけではありません。ビジネスマンだとか普通の人々によって構成されているわけですが、もし彼らが目指していることが実際に起こったら大変なことになるわけで、ひょっとしたら核戦争が起こるかも知れない。しかし、核戦争をも恐れないというのがディスペンセイシヨナリストです。そのような彼らの信仰の根拠になっているのは何か。先ほど小原先生が、『レフト・ビハインド』という小説を紹介さ

れました。ベストセラーになった小説です。ジャンボジェット機のなかから急に人がいなくなる。これは何かと言うと、キリストの再臨とともに、「ラプチャー（Raptured）」が起こる。すなわち、「天に挙げられる」という意味です。『テサロニケの信徒への手紙 一』の5章に、「主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残る私たちが、眠りについた人たちより先になることは決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえると、神のラップが鳴り響くと、主ご自身が天から降って来られます。するとキリストに結ばれて、死んだ人たちがまず最初に復活し、それから、私たち生き残っている者が、空中でその神、復活のキリストと出会う」とあります。空中にいるあいだに、最後の宇宙大戦争であるハルマゲドンが地上で戦われますが、空中に挙げられキリストと一緒にとどまっている自分たちは生き延びるわけです。そしてハルマゲドンが終わったあと、彼らは神の国を建設するということです。このような信仰を持っている人々は核戦争も辞さない人々であり、本気で信じているところが恐ろしいと思います。

対イスラエルに関するアメリカのキリスト教徒の立場というのは、大きく分けて二つあるのではないかと思います。一つは、宗教右派のようにディスペンセイシヨナリズムを信じて、イスラエルを圧倒的に支持して行くというグループ。もう一つは、リベラル派にしばしば見られるものなのですが、「ホロコーストを忘れたのか」と訴えて、イスラエルを支持する人々です。「あなたは反ユダヤ主義者か」と批判されることを恐れて、ディスペンセイシヨナリストを批判することができないキリスト教徒です。

最後に、いままで述べてきたようなアメリカの選民思想を、どのように克服すべきかという問題を考えたいと思います。これを克服するためには、私は神学的議論をやらなければならないのではないかと考えています。一つの例として、マサ



チューセッツの選民思想を批判しロードアイランドをつくったロジャー・ウィリアムスの例を挙げたいと思います。マサチューセッツ湾岸植民地の場合、自分たちを理解するのに「予型論 (Typology)」を使いました。予型論とは、聖書のなかにいまの自分たちの予型（あるいは祖型）を見いだしていく。マサチューセッツ湾岸植民地の場合、それは神の選民としての古代イスラエルです。そして、自分たちを古代イスラエルと重ね合わせて理解する。すなわち、「予型」(type)としての選民である古代イスラエルに対して、自分たちをその「対型」(anti-type)であると理解します。マサチューセッツ湾岸植民地が現在における神の選民である「ニュー・イスラエル」であると理解しました。ところが、ロジャー・ウィリアムスはそれを批判するのです。古代イスラエルが自分たちにとっての予型であることは認めよう。しかし、マサチューセッツ湾岸植民地が古代イスラエルの対型としての選民あるいは神の民であるかどうかは分からないと主張したのです。これが明らかになるのは、終末においてのみである。マサチューセッツ湾岸植民地以外の何者かが古代イスラエルの対型となるかも知れない。このような神学議論を通して、マサチューセッツ湾岸植民地の

選民思想を批判し克服していった。その結果として、彼はマサチューセッツ湾岸植民地から追放されてしまうわけです。

このような神学的議論は、実は世俗的なかたちでのちのアメリカにおいて起こってきます。それがリンカーンの場合です。リンカーンが1861年、すなわち南北戦争が始まった年、北軍の最高司令官としてニュージャージー州議会でおこなった演説のなかで、アメリカのことを「almost chosen people」というふうに呼んでいる。「chosen people」とは選民のことですが、リンカーンはその言葉の前に「almost」という言葉を付けているのです。これは思想的にはロジャー・ウィリアムスの系譜なのではないか。いまのブッシュ政権、ブッシュ大統領は明らかにマサチューセッツ湾岸植民地の系譜であって、自分たちが選民であることを疑わない。それではアメリカを選民として信じて疑わないアメリカのキリスト教以外に、今日、ロジャー・ウィリアムスやリンカーンの系譜を引いているアメリカのキリスト教とは、どのようなグループであり、どのような運動を行っているのかと考えると、非常に心もとないというのが現実ではないかと思います。以上で終わります。



『千年王国』とアメリカの使命

森 孝一（一神教学際研究センター長）

1. はじめに

●アメリカとイスラーム世界の対立の原因となり、共存を妨げているもの

1) アメリカの傲慢さ

その原因となっている、ネオコン的な「力」による普遍的（アメリカ的）「理念」の強制。

2) パレスチナ・イスラエル問題における、アメリカの一方的なイスラエル支持

↓

どちらも、アメリカのキリスト教、あるいは「見えざる国教」（civil religion）が深く関係している。

この発表では、「千年王国」思想とそれに関連した「アメリカの使命」という視点から、アメリカにとっての「共存を妨げるもの」について考えてみた。

2. アメリカ外交と普遍的理念

●ベトナム戦争敗戦20年後の1995年、当時の国防長官ロバート・マクナマラは『マクナマラ回顧録』を出版した。彼はこのなかで、「アメリカが大失敗を犯した主要な理由」として11点をあげている。そのなかには、今日、アメリカが耳を傾けるべき項目が含まれている。

(4) 地域に住む人たちの歴史、文化、政治、さらには指導者たちの人柄や習慣についてのわれわれの深刻な無知。

(5) 通常のタイプとちがう、きわめて強い動機を持った人民の運動と対決したさい、アメリカの持つ近代的でハイテクを駆使した装備、兵力、それに軍事思想の限界を…認識していませんでした。われわれはまた、自分たちとはまったく異なる文化を持つ人たちの心からの支持を獲得する任務に、軍事技術を切り替えていくことにも失敗しました。

(8) アメリカの国民も、その指導者たちも、全知の存在ではないことを、われわれは認識していませんでした。…すべての国家を、アメリカ自身のイメージとか、われわれの好みにしたがって作り上げて行く天与の権利をわれわれは持っていません。

(4) と (8) は、自由と民主主義という「アメリカの理念」を中東にそして世界に拡大することが、アメリカを安全にするというブッシュ大統領の「理念のグローバリズム」に対する辛辣な批判である。

しかし、マクナマラは『回顧録』のなかの他の箇所では、上記の反省の言葉とは矛盾する発言を行っている。

ケネディ、ジョンソン両政権で、ベトナムについての決定に参加したわれわれは、この国の原則と伝統と考えるものにしたがって行動しました。これらの価値観に基づいて決定を下したのです。…

われわれは、価値観や意図についてのあやまちではなく、判断と能力によるあやまちを犯したのだ、と私は心から信じています。



このマクナマラの発言はつぎのように要約できるだろう。すなわち、ベトナム戦争の「大義」は間違っていなかった。それはアメリカの「原則」、「伝統」、「価値観」に基づくものであった。「あやまちを犯した」とするなら、それは「判断と能力」、すなわち、「戦略とその実行力」によるあやまちであった、と。

ベトナムからの撤退は、結局は、米軍の戦死者の数が、ベトナム戦争の「大義」と比較したときに、バランスを欠いたものとなったからに他ならない。「大義」は間違っていない。あれほどの戦死者を出してしまった原因は、「大義」を実現するための戦略と実行力に問題があったのだと、マクナマラは考えている。

アメリカは将来、イラクから手を引くだろう。ブッシュは引退後に出版されるであろう『回顧録』のなかで、イラク戦争をどのように回顧するのだろうか。マクナマラと同じように、「イラク戦争の『大義』はまちがってはいなかった。それを実現するための戦略においてあやまちを犯したために、多くの戦死者を出してしまった」と回顧するなら、アメリカは将来、第2、第3のベトナム戦争、イラク戦争を繰り返すに違いない。アメリカに必要なもの、それは「大義」そのものについての反省である。

●マクナマラの回顧録に見られるように、価値観が外交に大きな影響を与えているところにアメリカ外交の特徴が見られる。

○外交を決定する3要素（五百旗頭 真）

- ①力の均衡
- ②経済的利益
- ③普遍的理念

↓
○なぜ他国以上に、アメリカでは普遍的理念が外交を決定する大きな要素になるのか。
アメリカの場合、外交だけではない。内政においても。「文化戦争」＝価値観による対立。
中絶や同性婚が大統領選挙の争点になる。

↓
人間は「意味を求める」という本性を持った存在であるから。
アメリカの存在の意味とは何か？（＝建国の理念）〔後述〕

↓
民族や文化を国家の共通基盤に置くことのできないアメリカは、建国の意味（国家の存在の意味）を理念のうえに置かざるをえない。

●アメリカ外交とアメリカの海外伝道の類似性

（小檜山ルイ「海外伝道と世界のアメリカ化」、森 孝一（編著）『アメリカと宗教』、日本国際問題研究所、1997年）、123頁。）

モンロー主義を放棄し、積極外交へと転換した（米西戦争：1898年）アメリカは、外交において海外伝道のレトリックを用いた。

↑
ヨーロッパと自分たちを区別するために（アメリカ例外論）。
反植民地主義＝領土的野心はない←アメリカは十分な国土を持っていた。必要であったものは、海外市場（本心）。



「帝国主義的反植民地主義」(Imperial Anti-colonialism)は19世紀末のアメリカにおいて、疑問の余地のない真理であった。(拙書序章「文明の帝国主義」、『宗教からよむ「アメリカ」』、講談社選書メチエ、1996年、16-18頁。)

↓

○フィリピンへの出兵とマッキンリー大統領(1898年)

私は毎晩、夜中までホワイト・ハウスのなかを歩き回っていた。…私はいく晩も全能の神に光と導きを祈った。そして、ある晩おそく、次のように神の光と導きが示された。それがどのようにして示されたかは私には分からない。しかし、確かに示されたのだった。その内容は(1)…(4)残されている道は、フィリピン人を教育し、高め、文明化し、キリスト教化するために、アメリカがフィリピンを統治することである。…こうして、私はベッドに入り、眠りについた。そして、ぐっすりと眠ることができた。

↓

文明化＝アメリカ化(内容は、共和制原理[自由と民主主義]、キリスト教)
今日のグローバル化

◆海外伝道における「影響の反射」(reflex influence)

海外伝道での成功を見ることによって、自らの信仰の正しさを確認し、信仰心が高まる。

↓

外交においても、普遍的理念の正しさを確認する。
ベトナム戦争での敗戦がアメリカに与えたショック。イラク戦争も同様。

●イラク戦争の大義とその宗教的表現

アメリカ国民は、自由がすべての人びとの権利であり、すべての国家の未来であることを知っている。自由はアメリカが世界に対して与えるものではなく、神が人類に対して与えるものである。(2003年1月18日のブッシュ大統領の「一般教書演説」)

アメリカへの攻撃は、アメリカを国家として成立させている理想に対する攻撃であった。その理想とは「自由と平等」であり、それが存在しているかどうか、いま戦っている敵とアメリカとの最大の相違である。この自由と平等を私たちに与えたのは創造主である。…私たちは、いまこの時、神が私たちを一つにしてくださいを知っている。今夜、ここで祈り求めることは、神が私たちに目を注ぎ続けてくださることだ。私たちの国家は強力である。しかし、私たちの大義は国家よりも偉大である(Our cause is even larger than our country)。その大義とは、人間の尊厳であり自由である。このアメリカの理想はすべての人類の希望である。これらを得ようとする希望が、何百万人もの人びとをこの港に引き寄せた。希望の光は、今なお、私たちの道を照らしている。光は闇のなかで輝いている。そして、闇は光に勝つことはない。神よ、アメリカを祝福したまえ。([9.11] 1周年のブッシュ大統領の演説)

↑

○「独立宣言」(1776年)

われわれは、次のような真理をごく当たり前のことだと考えている。つまり、すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられてお



り、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている。

↓
独立革命からイラク戦争までの、アメリカの一貫した戦争の大義（＝啓蒙主義の理念・基本的人権）を世界において実現することの源流は、アメリカ革命である。

↓
フランスの建国の大義も啓蒙主義・基本的人権。しかし、フランスには世界に対する「使命感」はない。

使命感はアメリカ独自のもの？

↓
アメリカの独善と傲慢（共存を妨げているもの）である、世界に対するアメリカの使命感の源流は何か？

3. ピューリタニズム

●イギリスの宗教改革。

「上から」の宗教改革＝英国国教会の成立

「下から」の宗教改革＝ピューリタニズム

●ピューリタン、ピューリタニズム←pure, purify

会衆派教会、長老派教会、バプテスト教会

メアリー1世のピューリタン迫害→大陸へ、とくにカルバンのジュネーブ
カルバンの予定説→ピューリタンは予定説に耐えられなかった。→Visible Saints
「印」を求める→下記の①と②

●ピューリタンの信仰の特徴

①救われたという宗教体験（回心体験）

②無制限の恩恵に対する応答としての善行

個人レベル

社会（国家）レベル

ピューリタン革命とニュー・イングランドの聖書的政治体制（神権政治・Holy Commonwealth）

③千年王国 終末意識（終わりの時を生きている）

②とともに、17世紀の英米のピューリタンをピューリタン革命とニュー・イングランドの聖書的政治体制（Holy Commonwealth）の形成へと向かわせたものが、③千年王国 終末意識（終わりの時を生きている）。（岩井 淳『千年王国を夢みた革命—17世紀英米のピューリタン』、講談社選書メチエ、1995年。）

●John Winthrop 「キリスト教的慈悲のひな形」（1630年）

（R. N. Bellah『破られた契約』未来社、1983、45-47頁）



かくして神と我らの間に大目的があり、この仕事のために我らは神との契約を結んだのである。…もし神が我らの祈りに耳をかたむけ、平和裡に我らがのぞむ地に導き給うなら、神はこの契約を認め、我らの任務を認証したもうたのだ。…しかし我らが目的として示した契約の簡条を守らず、神の心に背き、我らやその子孫のために大きなことを希い、この世の快樂におぼれ、肉慾に負けた行いをするなら、必ずや神は怒り、そういう誓いを破った人びとに報いを下し、この契約を破った代価を我らに知らしめ給うであろう。

……この目的を果すために、我らは仕事に協力して一体となり、互いに兄弟愛で接し合い、他人が必要とするものを与えるために自分の贅沢をいましめ、柔和で優しく、忍耐と寛い心で親しく取引をし、互いに楽しみ、他人のことは我がこととし、共に喜び悲しみ、共に働き苦しみ、…一つの体としての共同体を忘れず、平和の絆のうちに心の一致をもたなければならない。…そして我らが主の讃美と栄光とされるとき、我らはイスラエルの神が我らのただ中にいますことを知り、人びとは我らの植民事業の成功について語るであろう。主はそれをもって新しい英国（ニューイングランド）となし給わんことを。何故なら我らは丘の上の町（マタイ5：14「あなたがたは世の光である。山の上の町は、隠れることができない。」）となることを考えなければならず、すべての人の目は我らの上に注がれているからである。…愛する者よ。きょう、命とさいわい、および死と災いが我らの前に置かれている。すなわち、きょう我らの神、主を愛し、互いに愛し合い、主の道を歩み、その戒めと定めと、おきてと、また我らの主の契約簡条を守ることを命じられた。それに従うならば、我らは生きながらえ、その数は多くなるであろう。…しかしもし我らが心をそむけて聞き従わず、誘われて…

他の神々、自らの快樂や利益を拝み、それらに仕えるならば…その良き地から、必ず滅び去らしめられるであろう。

だから、すべからく生命を選ぼうではないか。
我らと子孫が生きながらえるよう、
主のみ声に従い、主に頼みつつ、
主は我らの生命・我等の榮なり。（申命記30章）

○National Identity、Identity Politic（多数派の）原型

New Israel、City upon a Hill、New England



●ロードアイランドとマサチューセッツ

ニュー・イングランド植民地の多様性→アメリカ合衆国の多様性。

Roger Williams のマサチューセッツ批判＝近代的な政教分離（公私の区別）の原型
多様性と統合

●三宅威仁（訳）『アメリカ教会の現実と使命：プロテスタント主流派・福音派・カトリック』（新教出版社）（Martin Marty, *The Public Church*, Crossroad, 1981）の「訳者あとがき」

現在、アメリカ合衆国で用いられているすべての硬貨には、E PLURIBUS UNUM というモットーが刻まれている。「多から一（が生じる）」という意味のこのラテン語は、



アメリカが複数の州から成る国家であることを示している。硬貨を裏返すと、IN GOD WE TRUST という文字が見える。この標語は、アメリカ国民が神を信じ、国家を神に委ねるという決意を表している。…多様性を重んじながら統一を生み出すこと、個々人の信教の自由を守りながら国家全体の存在を神に根拠づけることは、アメリカの建国期からの課題であった。

従って、アメリカにおける政治あるいは宗教に関心を抱く者にとっては、この「多様性と統一」および「個人の信仰と社会の秩序」という問題は、避けて通ることのできない研究課題である。

↓

●アメリカ宗教における「多様性と統一」

- ①憲法修正第一条（政教分離・信教の自由）による多様性の承認 [←ロードアイランド]
- ②「見えざる国教」（civil religion）による統一 [←マサチューセッツ]。

4. 前千年王国思想から、「世俗的千年王国思想」へ

●千年王国とは？

わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降ってくるのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。…彼らはキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。

（「ヨハネの黙示録」20章1節以下）

●前千年王国思想と後千年王国思想

「キリストの再臨」と「千年王国の実現」

前千年王国思想：キリストが再臨し、この世を審いたのちに、千年王国を実現する。

後千年王国思想：教会（神の民）の努力によって千年王国が実現し、その後に、キリストが再臨する。

●ピューリタン革命、ニュー・イングランドの聖書的政治体制（Holy Commonwealth）をめざしたピューリタンたちは、前千年王国主義者。→関心事は、千年王国の実現ではなく、キリストの再臨に備えるために、審きに備えるための、純粋な教会と正しい国家の建設。

↓

●アメリカにおける千年王国思想の変化と Jonathan Edwards。

アメリカ革命直前の1730～1760年、全ニュー・イングランドを巻き込んで起こった「第一次大覚醒」の指導的神学者。

ピューリタンの前千年王国思想→後千年王国思想へ。

第一次大覚醒を千年王国実現の「印」と考えた。それだけでなく、イギリス、ヨーロッパにおける同時代の信仰復興運動に、千年王国到来の「印」を求めた。

エドワーズの関心事は、キリストの再臨よりも、千年王国の到来。彼はアメリカに終末論的な、特別の役割を見いだした。



(増井志津代『植民地時代アメリカの宗教思想：ピューリタニズムと大西洋世界』、上智大学出版、2006年。)

●アメリカ独立革命と千年王国

(斉藤 眞「アメリカ革命と宗教」、森 孝一編著『アメリカと宗教』)

トマス・ペイン『コモン・センス』(1776年)

当時のニュー・イングランド人口250万人であった時代に、30万部売れた。

本来は反キリスト教的であったトマス・ペインが、聖書の粹組み・用語多用して、世襲的君主制を批判し、イギリスからの独立の必要性を民衆に訴えた。

彼は大覚醒の実態を目撃し、民衆における千年王国的信仰の影響力を体験していた。
アメリカ革命を千年王国到来の「印」と理解する。

○ケベック法 (1774年)

ニュー・イングランドにとっての「ニュー・フランス」

カトリック教会とフランスをダブらせ、ローマ教皇を戴く「反キリスト」との戦いというレトリック。この戦いに勝利することが、千年王国到来の一つの「印」。

1763年、「フランス・インディアン戦争」(French and Indian War)にニュー・イングランドが勝利。

ニュー・イングランドの期待に反して、英国本国は旧ニュー・フランスを英国の直轄の植民地に。さらに、旧ニュー・フランス地域において、従来通り、カトリック教会を法定教会(国教)とすることを英国は承認した。

↓

フランスだけでなく、英国本国が終末における「反キリスト」と認識されるようになった。

○斎藤 眞はアメリカ独立革命における千年王国的信仰を「世俗的千年王国論」と呼んで、その影響力の重要性を指摘している。

●千年王国思想における二元論的世界観とアメリカ

終末のシナリオにおける二元論的世界観＝「キリスト陣営」と「反キリスト陣営」

アメリカ独立革命以降の「世俗的千年王国論」においても、この二元論的世界認識の粹組みは継承され、アメリカが「キリスト陣営」の中核とされた。

冷戦期の「反キリスト」としてのソ連。

↓

冷戦後の「反キリスト」としてのイラン。

「反カトリック」と「反シーア派」

●前千年王国主義者であったピューリタンの関心は、キリストの再臨に備えるために、純粋な教会と社会(国家)を形成すること。外に向かった「使命感」は存在しない。

↓

J・エドワーズの後千年王国思想以降、アメリカに特別な終末論的役割(使命感)が与えら

れ、関心は世界に向かった。

5. アメリカのキリスト教原理主義者（宗教右派）と千年王国

(Grace Halsell, "Why Christian Zionists Support Israel," Hassan Haddad and Donald Wagner (ed.), *All in the Name of the Bible: Selected Essays on Israel and American Christian Fundamentalism*, Amana Books, 1986.)

宗教右派は前千年王国主義者。

宗教右派の中絶反対とイラク戦争支持は、どこで結びつくのか？

●アメリカの前千年王国主義者の変化

アメリカのファンダメンタリストは、1948年のイスラエル建国によって劇的に変化した。
＝dispensationalism への傾斜。7つの dispensations。イスラエルが主役となる。ユダヤ人のパレスチナへの帰還と建国。(＝「影響の反射」)

イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリストは地球の年齢について、キリスト教の処女降誕など、過去の事柄が論点。

↓

現在と将来が関心事となる。その時に焦点はイスラエル。

ユダヤ人の帰還と建国のつぎは、dispensationalists によれば、神殿の建設。

岩のドームとアル・アクサ・モスクがある場所に。モスクを破壊し、神殿を建設する。

Temple Mount Foundation

↓

核による第三次大戦

Dispensationalists は核によるアルマゲドン信じている。彼らは特異な人びとではなく、fine suites で固めた普通の人。

核戦争が始まる直前に、「天に挙げられる」(Raptured) →ベストセラーの *Left Behind*。

主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降ってこられます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で神と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。

(「テサロニケの信徒への手紙 一」 5章15節以下)

1981年、イスラエルがイランの各施設を空爆した後、当時のベギン首相はアメリカのテレビのインタビューを受けた。その直前に、ベギン首相はアメリカのラビや政治家ではなく、Jerry Falwell に電話を入れて支持を要請した。



有力なテレビ説教の大半は、dispensationalists。

●対イスラエルに関して、今日、アメリカのキリスト教徒は2つのグループに分断されている。

①dispensationalism を信じて、イスラエルを支持する宗教右派。

②「ホロコーストを忘れたのか」、「あなたは反ユダヤ主義者（anti-Semites）か」と批判されることを恐れて、dispensationalism を批判することができないキリスト教徒。

『千年王国』とアメリカの使命
 「共存を妨げるものーキリスト教の場合」
 森孝一
 (一神教学際研究センター長)
 同志社大学 一神教学際研究センター 部門研究
 2007年7月21日

1、はじめに

1、はじめに
 アメリカとイスラーム世界の
 対立の原因となり、共存を妨げているもの

1、はじめに
 アメリカとイスラーム世界の
 対立の原因となり、共存を妨げているもの
 (1)アメリカの傲慢さ
 → ネオコン的な「力」による
 普遍的 (アメリカ的) 「理念」の強制

1、はじめに
 アメリカとイスラーム世界の
 対立の原因となり、共存を妨げているもの
 (1)アメリカの傲慢さ
 → ネオコン的な「力」による
 普遍的 (アメリカ的) 「理念」の強制
 (2)パレスチナ・イスラエル問題における、
 アメリカの一方的なイスラエル支持

2、アメリカ外交と普遍的理念

2、アメリカ外交と普遍的理念
 ロバート・マクナマラ
 『マクナマラ回顧録』、1995年。
 「アメリカが大失敗を
 犯した主要な理由」
 11項目

『マクナマラ回顧録』(1)


『マクナマラ回顧録』(1)
 (4) 他国に住む人たちの歴史、文化、政治、
 さらには指導者たちの人物や習慣についての
 わけつきの深刻な無知。


『マクナマラ回顧録』(1)

- (4) 地域に住む人たちの歴史、文化、政治、さらには指導者たちの人柄や習慣についてのわれわれの深刻な無知。
- (5) 通常のタイプと異なるが、きわめて強い動機を持った人種の運動に反対したさい、アメリカの持つ近代的でハイテクを駆使した鉄鋼、兵火、それに軍事思想の限界を...認識していませんでした。
- われわれはまた、自分たちとはまったく異なる文化を持つ人々たちの心からの支持を獲得する任務に、軍事技術の切り替えしていくことにも失敗しました。



『マクナマラ回顧録』(2)

↑ 他の箇所では、矛盾する発言も...



外交を決定する3要素 (五百旗部 真)

(1) 力の均衡

『マクナマラ回顧録』(1)

- (3) アメリカの国民も、その指導者たちも、本質的には認識していませんでした。...すべての国を、アメリカ自身のイメージとか、われわれの好みにしたがって作り上げて行く天の権利をわれわれは持っていません。



『マクナマラ回顧録』(2)

↑ 他の箇所では、矛盾する発言も...



- ケネディ、ジョンソン總統権で、ベトナムについての決定に参画したわれわれは、この国の憲制と伝統と考えるものにしたがって行動しました。これらの価値観に基づいて決定を下したのです。
- われわれは、価値観や原則についてのあやまちではなく、判断と能力によるあやまちを犯したのだ、と私は心から痛めています。

外交を決定する3要素 (五百旗部 真)

(1) 力の均衡

(2) 経済的国益

『マクナマラ回顧録』(2)



外交を決定する3要素 (五百旗部 真)

(1) 力の均衡

(2) 経済的国益

(3) 普遍的理念

外交を決定する3要素 (五百旗部 真)

外交を決定する3要素 (五百旗部 實)

(3) 普遍的理念

普遍的理念

なぜ他国以上に、アメリカでは普遍的理念が
外交を決定する大きな要素になるのか。

人間は「意味を求める」
という本性を持った存在であるから。



普遍的理念

普遍的理念

なぜ他国以上に、アメリカでは普遍的理念が
外交を決定する大きな要素になるのか。

人間は「意味を求める」
という本性を持った存在であるから。



アメリカの存在の意味とは何か？
(=建国の理念)

アメリカ外交と アメリカの海外伝道の類似性



小嶋山は「海外伝道と世界のアメリカ化」
の著者（編著）『アメリカと宗教』
（日本基督教団神学研究所、1997年）、123頁。）

アメリカ外交と アメリカの海外伝道の類似性



小嶋山は「海外伝道と世界のアメリカ化」
の著者（編著）『アメリカと宗教』
（日本基督教団神学研究所、1997年）、123頁。）

アメリカ外交と アメリカの海外伝道の類似性



小嶋山は「海外伝道と世界のアメリカ化」
の著者（編著）『アメリカと宗教』
（日本基督教団神学研究所、1997年）、123頁。）

モンロー主義を放棄し、積極外交へと転換した
(米西戦争：1898年) アメリカは、
外交において海外伝道のレトリックを用いた。

ヨーロッパと自分たちを
区別するために（アメリカ国外へ）

反植民地主義＝領土の野心はない

アメリカは十分な国士を持っていた。
必要であったものは、海外市場（本心）



部門研究 1 「一神教の再考と文明の対話」研究会
部門研究 2 「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会

フィリピンへの出兵と マッキンリー大統領

残されている道は、
フィリピン人を教育し、
高め、文明化し、
キリスト教化するために、
アメリカがフィリピンを
統治する
ことである。



海外伝道における 「反射の影響」(Reflex Influence)

海外伝道での
成功を見ること
によって、
自らの信仰の
正しさを確認し、
信仰心が高まる。

外交においても、
普遍的理念の正しさを
確認する。

イラク戦争の大義と その宗教的表現

アメリカ国民は、自由がすべての人びとの権利であり、
すべての国家の未来であることを知っている。
自由はアメリカが世界に対して与えるものではなく、
神が人類に対して与えるものである。

(2003年1月18日のワシントン新聞の「一紙新聞要約」)

自由と平等を私たちに与えるのは創設主である。
...私たちが、いまこの時、神が私たちに
一つにしてくださることを知っている。
今際、ここで祈り求めることは、
神が私たちに目を注ぎ続けてくださることだ。
私たちの大義は国家よりも偉大である
(Our cause is even larger than our country).
その大義とは、人間の尊厳であり自由である。
神よ、アメリカを祝福したまえ。
(「9.11」直後のワシントン新聞の要約)



フィリピンへの出兵と マッキンリー大統領



海外伝道における 「反射の影響」(Reflex Influence)

海外伝道での
成功を見ること
によって、
自らの信仰の
正しさを確認し、
信仰心が高まる。

イラク戦争の大義と その宗教的表現

アメリカ国民は、自由がすべての人びとの権利であり、
すべての国家の未来であることを知っている。
自由はアメリカが世界に対して与えるものではなく、
神が人類に対して与えるものである。

(2003年1月18日のワシントン新聞の「一紙新聞要約」)

自由と平等を私たちに与えるのは創設主である。
...私たちが、いまこの時、神が私たちに
一つにしてくださることを知っている。
今際、ここで祈り求めることは、
神が私たちに目を注ぎ続けてくださることだ。
私たちの大義は国家よりも偉大である
(Our cause is even larger than our country).
その大義とは、人間の尊厳であり自由である。
神よ、アメリカを祝福したまえ。
(「9.11」直後のワシントン新聞の要約)



アメリカ外交と アメリカの海外伝道の類似性

モンロー主義を放棄し、積極外交を推進した。
(米西戦争：1898年)
外交において海外伝道のし
た。
た。

「帝国主義的反動抵抗主義」(Imperial Anti-colonialism) は
19世紀末のアメリカにおいて、異国の宗廟のない制度であった。
(『新書』「文明の海外主義」、『宗教からよむ「アメリカ」』、講談社選書
メダエ、1998年、16-18頁。)

アメリカの海外伝道(1890年代、1907年、12月。)

必要であったものは、海外市場(本心)

海外伝道における 「反射の影響」(Reflex Influence)

海外伝道における 「反射の影響」(Reflex Influence)

海外伝道での
成功を見ること
によって、
自らの信仰の
正しさを確認し、
信仰心が高まる。

外交においても、
普遍的理念の正しさを
確認する。

ベトナム戦争での敗戦が
アメリカに与えたショック。
イラク戦争も同様。

「独立宣言」(1776年)

すべての人間は神によって平等に造られ、
一定の譲り渡すことのできない権利を
与えられており、その権利のなかには
生命、自由、幸福の追求が含まれている。



「独立宣言」(1776年)

すべての人間は神によって平等に造られ、
一定の譲り渡すことのできない権利を
与えられており、その権利のなかには
生命、自由、幸福の追求が含まれている。



独立革命からイラク戦争までの、
アメリカの個した戦争の大義（＝自衛主義の理念・基本的入場）
を世界において実現することの源流は、アメリカ革命である。

フランスの建国の大義も自衛主義・基本的入場。
しかし、フランスには世界に対する
「使命感」はない。
使命感はアメリカ独自のもの？



3、ピューリタニズム

イギリスの宗教改革

- 「上から」の宗教改革 → 英国教会の成立
- 「下から」の宗教改革

「独立宣言」(1776年)

すべての人間は神によって平等に造られ、
一定の譲り渡すことのできない権利を
与えられており、その権利のなかには
生命、自由、幸福の追求が含まれている。



アメリカの独善と傲慢
(共存を妨げているもの)である、
世界に対するアメリカの使命感
の源流は何か？

フランスの建国の大義も自衛主義・基本的入場。
しかし、フランスには世界に対する
「使命感」はない。
使命感はアメリカ独自のもの？



3、ピューリタニズム

イギリスの宗教改革

- 「上から」の宗教改革 → 英国教会の成立
- 「下から」の宗教改革 → プューリタニズム

「独立宣言」(1776年)

すべての人間は神によって平等に造られ、
一定の譲り渡すことのできない権利を
与えられており、その権利のなかには
生命、自由、幸福の追求が含まれている。



独立革命からイラク戦争までの、
アメリカの個した戦争の大義（＝自衛主義の理念・基本的入場）
を世界において実現することの源流は、アメリカ革命である。

3、ピューリタニズム

イギリスの宗教改革

- 「上から」の宗教改革
- 「下から」の宗教改革

ピューリタン、ピューリタニズム
pure, purify





ピューリタン、ピューリタニズム
pure, purify

カルバンの予定説

ピューリタンは
予定説に耐えられなかった

Visible Saints
「印」を求める



ピューリタン信仰の特徴

- ① 救われたという宗教体験 (回心体験)
- ② 無制限の恩恵に対する応答としての善行
 - 個人レベル
 - 社会 (国家) レベル
- ③ 千年王国 終末意識 (終わりの時を生きている)

John Winthrop
「キリスト教的慈悲のひな形」(1630年)

...この目的を果すために、我々は仕事に協力して一体となり、互いに兄弟愛で抱き合い、他人が必要とするものを与えるために自分の富をいさぎよく、謙和で優しく、忍耐と寛い心で割く取柄を、互いに楽しみ、他人のことは我がこととし、共に喜び、共に働き、一つの体としての共同体を築く。...一つの体のうちの一の部分を忘れるが、平和の神のうちに心の一筋を忘れない。

威られた契約
1630年

(R. N. Winthrop, 『威られた契約』、原典: 1630年、1674年)

ピューリタン、ピューリタニズム
pure, purify

カルバンの予定説

ピューリタンは
予定説に耐えられなかった



ピューリタン信仰の特徴

- ① 救われたという宗教体験 (回心体験)
- ② 無制限の恩恵に対する応答としての善行
- ③ 千年王国 終末意識 (終わりの時を生きている)

John Winthrop
「キリスト教的慈悲のひな形」(1630年)

かくして神と我らの間に大目的があり、この仕事のために我らは神との契約を結んだのである。

...もし神が我らの祈りに耳をかたむけ、平和に我らに我らの罪を赦すなら、神はこの契約を認め、我らの任務を即座に果たすものだからだ。

...しかし我らが目的として示した契約の約束を守らず、神の心に背き、我らやその子孫のために大きなことを成し、この世の体面におぼれ、肉慾に耽溺した行いをなすなら、必ず神は怒り、そういう悪い行いを成した人びとに報いを下し、この契約を破った代価を我らに知らしめ給うであらう。

威られた契約
1630年

(R. N. Winthrop, 『威られた契約』、原典: 1630年、1674年)

ピューリタン、ピューリタニズム
pure, purify

カルバンの予定説



ピューリタン信仰の特徴

ピューリタン信仰の特徴

- ① 救われたという宗教体験 (回心体験)
- ② 無制限の恩恵に対する応答としての善行
 - 個人レベル
 - 社会 (国家) レベル
- ③ 千年王国 終末意識 (終わりの時を生きている)

ピューリタン革命とニュー・イングランドの
聖約政治体制 (神権政治・Holy Commonwealth)



「多様性と統一」
「個人の信仰と社会の秩序」



多様性を重んじながら統一を生み出すこと、個々人の
信仰の自由を守りながら国家全体の存在を神に問
づけることは、アメリカの建国精神からの課題であった。
従って、アメリカにおける政治あるいは宗教に関心を
抱く者にとっては、この「多様性と統一」および
「個人の信仰と社会の秩序」という問題は、避けて
通ることのできない研究課題である。

三宅順に『神』「アメリカ教会の歴史と使命」
プロテスタント主義派・福音派・カトリック（福音派）
の『聖書』を基に、
「聖書」を基に、

アメリカ宗教における
「多様性と統一」

- ①憲法修正第一條（政教分離・新教の自由）による
多様性の承認
- ②「見えざる国教」（civil religion）による統一

ロードアイランド
マサチューセッツ

前千年王国思想と後千年王国思想

- 「キリストの再臨」と「千年王国の実現」
- 前千年王国思想：
後千年王国思想：

「多様性と統一」
「個人の信仰と社会の秩序」

E PLURIBUS UNUM
「多から一（が生じる）」
IN GOD WE TRUST



アメリカ宗教における
「多様性と統一」

- ①憲法修正第一條（政教分離・新教の自由）による
多様性の承認
- ②「見えざる国教」（civil religion）による統一

ロードアイランド

4、前千年王国思想から、
「世俗的千年王国思想」へ

千年王国とは？

わたしはまた、一人の天使が、歴代しの頂の大きな額を手にして、
天から降ってくるのを見た。この天使は、聖書でもサタンでもある、
年を結ぶものの数、つまり歳を取り除く。千年の間閉じられて、
歴代しの頂に投げ入れ、鎖を掛け、その上に封印を施して、千年が経たぬまで、
もうそれ以上、鎖の鎖を解きかきないようにした。

その後で、私はしばらくの間、観察されるはずである。
...彼らはキリストの再来によって、千年の間キリストと共に統治する。
（『三十八年の黙示録』、2.0版（第1部）以下）

「多様性と統一」
「個人の信仰と社会の秩序」

E PLURIBUS UNUM
「多から一（が生じる）」



アメリカ宗教における
「多様性と統一」

- ①憲法修正第一條（政教分離・新教の自由）による
多様性の承認
- ②「見えざる国教」（civil religion）による統一

4、前千年王国思想から、
「世俗的千年王国思想」へ



前千年王国思想と後千年王国思想

- ・「キリストの再臨」と「千年王国の実現」
- ・前千年王国思想：
キリストが再臨し、この世を審いたのちに、
千年王国を実現する
- ・後千年王国思想：

ピューリタン革命

ニュー・イングランドの
聖書的政治体制 (Holy Commonwealth)
をめざしたピューリタンたちは、
前千年王国主義者



関心事は、キリストの再臨に備えるために、
審きに備えるための、
純粋な教会と正しい国家の建設

千年王国思想の変化と Jonathan Edwards

- ・アメリカ革命直前の1730～1760年、全ニュー・イングランド
を巻き込んで起こった「第一次大覚醒」の指導的布教師。
- ・ピューリタンの前千年王国思想
⇒後千年王国思想へ
- ・第一次大覚醒を千年王国実現の「印」であると考えた。それだ
けでなく、イギリス、ヨーロッパにおける同時代の信仰復興
運動に、千年王国到来の「印」を求めた。
- ・エドワーズの関心事は、キリストの再臨よりも、千年王国の到
来。彼はアメリカに終末論的な、特異の役割を見いだした。

(関心事は「後千年王国」の宗教思想：ピューリタニズムと大覚醒運動、上野大寺出版、2006年。)

前千年王国思想と後千年王国思想

- ・「キリストの再臨」と「千年王国の実現」
- ・前千年王国思想：
キリストが再臨し、この世を審いたのちに、
千年王国を実現する
- ・後千年王国思想：
教会（神の民）の努力によって千年王国が実現し、
その後に、キリストが再臨する

千年王国思想の変化と Jonathan Edwards



アメリカ独立革命と千年王国



ピューリタン革命

ニュー・イングランドの
聖書的政治体制 (Holy Commonwealth)
をめざしたピューリタンたちは、
前千年王国主義者

千年王国思想の変化と Jonathan Edwards



- ・アメリカ革命直前の1730～1760年、全ニュー・イングランド
を巻き込んで起こった「第一次大覚醒」の指導的布教師。
- ・ピューリタンの前千年王国思想
- ・第一次大覚醒を千年王国実現の「印」であると考えた。それだ
けでなく、イギリス、ヨーロッパにおける同時代の信仰復興
運動に、千年王国到来の「印」を求めた。
- ・エドワーズの関心事は、キリストの再臨よりも、千年王国の到
来。彼はアメリカに終末論的な、特異の役割を見いだした。

(関心事は「後千年王国」の宗教思想：ピューリタニズムと大覚醒運動、上野大寺出版、2006年。)

アメリカ独立革命と千年王国



- ・トマス・ペイン『COMMON SENSE』(1776年)
- ・当時のニュー・イングランド人口250万人で
あった時代に、30万部頒布された



部門研究 1 「一神教の再考と文明の対話」研究会

部門研究 2 「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会

ケベック法 (1774年)

The Quebec Act

ケベック法 (1774年)

The Quebec Act

千年王国思想における 二元論的世界観とアメリカ

- 終末のシナリオにおける二元論的世界観
- アメリカ独立革命以降の「世俗的千年王国論」においても、この二元論的世界認識の枠組みは継承され、アメリカが「キリスト教世界」の中核とされた
- 冷戦期の「反キリスト」としてのソ連

ケベック法 (1774年)

The Quebec Act

ケベック法 (1774年)

The Quebec Act

千年王国思想における 二元論的世界観とアメリカ

- 終末のシナリオにおける二元論的世界観
- アメリカ独立革命以降の「世俗的千年王国論」においても、この二元論的世界認識の枠組みは継承され、アメリカが「キリスト教世界」の中核とされた
- 冷戦期の「反キリスト」としてのソ連

ケベック法 (1774年)

The Quebec Act

ケベック法 (1774年)

The Quebec Act

千年王国思想における 二元論的世界観とアメリカ

- 終末のシナリオにおける二元論的世界観
- アメリカ独立革命以降の「世俗的千年王国論」においても、この二元論的世界認識の枠組みは継承され、アメリカが「キリスト教世界」の中核とされた
- 冷戦期の「反キリスト」としてのソ連

アメリカの

終末論的役割（使命感）

アメリカの

終末論的役割（使命感）

前千年王国主義者であった
ピューリタンの関心は、
キリストの再臨に備えるために、
純粋な教会と社会（国家）を形成すること。
外に向かつての「使命感」は存在しない

アメリカの

終末論的役割（使命感）

前千年王国主義者であった
ピューリタンの関心は、
キリストの再臨に備えるために、
純粋な教会と社会（国家）を形成すること。
外に向かつての「使命感」は存在しない

J・エドワーズの後千年王国思想以降、
アメリカに特別の終末論的役割（使命感）
が与えられ、関心は世界に向かった

5、アメリカのキリスト教原理主義者 （宗教右派）と千年王国

5、アメリカのキリスト教原理主義者 （宗教右派）と千年王国

- 宗教右派は前千年王国主義者
- 宗教右派の中絶反対とイラク戦争支持は、
どこで結びつくのか？



Grace Hiesail, "Why Christian Zionists Support Israel,"
Hanan Haddad and Donald Wagner (ed.),
All in the Name of the Bible:
Selected Essays on Israel and American Christian Fundamentalism,
Amana Books, 1986.

アメリカの前千年王国主義者の変化

- アメリカのファンダメンタリストは、1948年のイスラエル
建国によって劇的に変化した
= dispensationalismへの傾斜
- 7つのdispensations. イスラエルが主役となる。ユダヤ人
のバレスチナへの帰還と建国 = 「影響の反射」
- イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリスト
は地球の年齢について、キリスト教の処女懐胎など、過去
の事柄が焦点

アメリカの前千年王国主義者の変化

- アメリカのファンダメンタリストは、1948年のイスラエル
建国によって劇的に変化した
= dispensationalismへの傾斜
- 7つのdispensations. イスラエルが主役となる。ユダヤ人
のバレスチナへの帰還と建国 = 「影響の反射」
- イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリスト
は地球の年齢について、キリスト教の処女懐胎など、過去
の事柄が焦点

アメリカの前千年王国主義者の変化

- アメリカのファンダメンタリストは、1948年のイスラエル
建国によって劇的に変化した
- 7つのdispensations. イスラエルが主役となる。ユダヤ人
のバレスチナへの帰還と建国
- イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリスト
は地球の年齢について、キリスト教の処女懐胎など、過去
の事柄が焦点

アメリカの前千年王国主義者の変化

- アメリカのファンダメンタリストは、1948年のイスラエル
建国によって劇的に変化した
= dispensationalismへの傾斜
- 7つのdispensations. イスラエルが主役となる。ユダヤ人
のバレスチナへの帰還と建国 = 「影響の反射」
- イスラエルの建国までは、アメリカのファンダメンタリスト
は地球の年齢について、キリスト教の処女懐胎など、過去
の事柄が焦点

現在と将来が関心事となる
その時に焦点はイスラエル





ユダヤ人の帰還と建国の次は…

主の言葉に基づいて次のことを伝えます。
主が約束される日までに生きているわたしたちが、
聖地についていた人々より先にすることは、
決してありません。すなわち、念願の命が分かれ、
大天使の叫び聞こえて、神のラッパの響くと、
主御自身が天から降ってこられます。
すると、キリストに迎はれて死んだ人たちが、
まず最初に復活し、それから、わたしたち
生き残っている者が、空中で神と出会うために、
彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。
このようにして、わたしたちはいつでも
主と共にいることになります。
(「ササロニクの手紙 一」 5章15節以下)

対イスラエルに関する アメリカのキリスト教徒

対イスラエルに関して、
今日、アメリカのキリスト教徒は2つ
のグループに分断されている

① dispensationalismを信じて、
イスラエルを支持する宗教右派

② 「ホロコーストを認めたのか」、
「あなたは反ユダヤ主義者 (anti-Semitism) か」と
批判されて、dispensationalismを批判
することができないキリスト教徒

6、終わりに 選民思想に対する神学的批判

Roger Williamsのマサチューセッツの
「類型論(Typology)」的自己理解に対する批判



選民としての古代イスラエル(「相型」Type)の
「対型」(Anti-Type)は、マサチューセッツである



ユダヤ人の帰還と建国の次は…

- ユダヤ人の帰還と建国のつぎは、
dispensationalistsによれば、神殿の建設。
- Temple Mount Foundation
- 「天に掣げられる」(Raptured)
- ベストセラーのLeft Behind.

対イスラエルに関する アメリカのキリスト教徒

対イスラエルに関して、
今日、アメリカのキリスト教徒は2つ
のグループに分断されている

① dispensationalismを信じて、
イスラエルを支持する宗教右派

6、終わりに 選民思想に対する神学的批判

Roger Williamsのマサチューセッツの
「類型論(Typology)」的自己理解に対する批判



ユダヤ人の帰還と建国の次は…

対イスラエルに関する アメリカのキリスト教徒

対イスラエルに関して、
今日、アメリカのキリスト教徒は2つ
のグループに分断されている

6、終わりに 選民思想に対する神学的批判

